始

特106
712 1

新婚の夜

孔雀園主人

目次

不思議な絵(一)……一
不思議な絵(二)……七
不思議な絵(三)……一〇
待女郎……一七
お色直し……二三
花嫁御……二〇
角隠し(一)……二五
角隠し(二)……四一
占めたもの……五〇
鳩……五六
狒々入道……六二
夜更の饂飩……七〇
誤診……七七
復讐……八二
幼馴染……八七
首途……九二
別離……九九
遐迩(一)……一〇六
遐迩(二)……一二二
遐迩(三)……一二五
入院……一二〇
離愁(一)……一二七
離愁(二)……一三一
犬の姿(一)……一三七
犬の姿(二)……一四二
犬の姿(三)……一四八
松吹く風……一五六
洗濯日和(一)……一六二

目次

洗濯日和（二）……一六六
洗濯日和（三）……一七一
惡智慧（一）……一七七
惡智慧（二）……一八六
世は樣々（一）……一九〇
世は樣々（二）……一九四
八ッ當り……二〇二
思ひ出……二〇七
尋ね人（一）……二一三
尋ね人（二）……二一八
告げ口（一）……二二六
告げ口（二）……二三一
木伊乃の説……二三五
裸人形……二四〇
わづらひ……二四五
親友（一）……二四九
親友（二）……二五五
親友（三）……二六四
引越（一）……二六九
引越（二）……二七四
惡計……二八〇
自暴自棄……二八五
藻脱の殼……二九一
誤解……二九五
遺産……二九六

不思議な繪（一）

『お爺さん、今歸りましたよ。』

麻の葉絞の結綿島田、鬢も髻もふつくりと出した、鬘のやうな黒い髪、色白く、細面にして、薄紅を帶びた頰の色の、美しさ、又艶麗さ。

すらりとした撫肩に、輕く掛けたは薄茶色の肩掛、矢絣お召の綿入に、黒繻子の襟を掛けて、媚めかしい友禪の長襦袢。蹴出しの褄もほの見ゆるまで、些と亂次な

く、着做して居るが、すらりとして長高く、緋七珍の心なし太鼓。細りとした柳腰に、ぐいと締めたは淡紅色縮緬の扱帶。齡の頃は十九か、八か。

此の服裝で、此姿で、娘は枝折戸をキイと押すと、小さな枯野の樣ぞ見ゆる、踏石傳ひに庭へ入つた。

木戸は自然に、トンと閉る。

爺さんと呼ばれたのは、其庭を前に控へて、緣の障子を明け放し、部屋一杯に穢な毛氈を敷いて、彼處に筆洗、此處に卦算、硯、筆立、刷毛、畫筆、廣やかな唐紙を擴げて、拙い繪を描いて居る人。

上髭なしの頤髯長く、筆の形をして居るのが、茶色染みて厭な色。頭はすぺりと禿げて居るので、眉の濃いのが一際目立つ。

白茶色の被布を着て、染浸だらけな銅色の手に、穗の長い畫筆を持つて、べとりと下し、しゆうと啜り、又さら〳〵颯と描く。

娘は密と忍び寄ると、緣側に手を支いて、又、

『お爺さん、今歸りましたよ、』と言つた。

『お丶！』

と言つたが、眼鏡越なので、キラリ光線に反射して、直ぐには額の方では見えず又仰向いて鼻から覗く。

『今歸つたか、』

『はい唯今、』

娘は會釋をして莞爾と、肩に掛けたる肩掛を取ると、くる〳〵と捲いて緣に捨て友禪の梅、花と咲かせて、藤紫の姿を上へ……。

穢爺の畫部屋には、時ならぬ花の香や、緣日商人の古道具店に、お雛樣を据ゑ

たる有様、桃の一枝があれば好い。
『早かつたでせう、』
頷いて、眼鏡を脱すと唐紙の上。爺は良横向になつて、後の手焙を引寄せたが、
『箆棒に早かつたぢやねえか、』
周圍を探して、眞鍮の煙管、臭い莨をじゆうと吸ふ。
『何うぢやの、些たア儲かつたかの、』
『あのね、其でも……、』
と、帶の間へ、娘は金襴の紙入を出して、半紙ぐるみ中を開けると、
『是だけ……、』と紙に包んだ物。
爺は受取つて透し見て、偖て吸殼をトンと拂くと、忙しげに開いて見る。と、
から五圓紙幣が一枚、餘り綺麗ではないのが出て來る。

爺は不服さうににやりと笑み、
『まあ可いさ、是だけ出しやアな、那の野郎にしちやよく出したくらゐのものぢや
今度が又あるからの、』
娘は默つて袂の振を直した。
『其處が大事さ、仕方がないわ、お前別に要る物はなしかの、』
娘はヒヨイと顏を上げると、
『は、いゝえ、今の處別に……、』
『ぢや此の儘預つて置くよ。』
『どうぞ……、』
爺は膨らまつた懷中から、づッしりと重さうな、茶柔皮の三つ折を出して來ると
前の方の開いた口へ入れて、くる〳〵と卷いて、又懷中へ藏ひ込むで、

『や、大きに御苦勞々々。店には、何うぢや、婆さんは居たかの、』
『は、』
『お客はなかつたやうぢやつたかの、』
『は、』
『何うぢや、晩には何か……鰻丼でも然う言はうかの、』
『いゝえ、欲しくはございません、』
『然し、私も、辛からうと思うでの、』
『……、』
『何うぢや、今夜も、行つてくれるか？』
娘は唯默つて居た。

不思議な繪(二)

『厭か、』
『いゝえ、』
『厭なら可いよ、外の勤たあ違ふぢやでの、』
『はい、』
『無理にとは言はんのぢや、』
『……、』
『行くか、』
『……、』

『止すか、』
やゝ急き込んで、
『これ、默つてゝは解らんぢやないか。』
娘は紅くなつた顏を上げて、
『は、參ります、參りますには參りますけれど……、』
『何處か體でも病いと云ふのか、』
『はい……、』と萎れた。
爺はやゝ不機嫌さうに、
『いや、そんなら可い、そんなら可いがの、唯默つてゝは解らんぢやで……、』
『はい、』
『兼々も言うて聞かす事ぢやが、大丈夫ぢやらうの、』

『……、』
『惚れはすまいの、』
『えゝ、もう、それは、』
『大丈夫ぢやらうの、』
『はい、』
『私も、それは、そればかりは、大丈夫ぢやろと思ふがの、』
『はい、』
『それさへなければ、いつ何時でも、休むが可いよ、』
『はい、』
『今夜は休むか、』
『はい、』と頷く。

『偶には休まにや疲れるぢやらうでの、』
『はい、』
と、娘は涙含むだ。
『可えさ、一晩ぐらゐ……。』
打遣るやうに言ふと、爺は又べとりと筆を……。描き始めたは人間の繪である然かもこれは、柄にもない、ポンチかと見れば、然うでもない。又、浮世繪かと見れば然うでもない。一種異樣の風俗畫で、其處等中に散らかつて居るのを見れば、皆、不思議な顏をした女……、奇體な風をした男……。

不思議な繪（三）

娘は吻と息を吐くと、
『何を又お始めなすつたんですの？』
と、爺は顏を上げて、
『いや、洋服を着て、髯を生して、洋杖を突いて歩いてをつても、洋刀を提げて、靴を穿いて、馬に乘つて歩いてをつても、男は皆な恁うなのぢや、喃。早い話が、あれ、あの音ぢや、トツチンカン〳〵。向うの家の若い衆は、何をしてると思はつしやる？』
小庭を隔てた向うの家は、鍛冶屋である。職人が居る。眞黑になつて、踏鞴の煙も、ムク〳〵と板塀の上から見ゆるのである。
『喃……、日がな一日あゝ遣つて、朝起きるから夜寢るまで、此の寒いのに襦袢一枚、炭火はあるから好いとして、手も足も股も脛も、面は素より、腹から胸まで

印度人を見るやうに、眞黑になつて稼いでると云ふのも、何の爲ぢやと思はつしやる？　食はう爲もあらうけれどぢや、唯食うて、働いて、睡るばかりが樂みなりや那麽辛い思ひはしずとも、一層死んだが益なのぢや。が、其處がそれ、死ねぬと云ふのも、喃……、』

と又べとりと筆を……、

『是あるが爲なのぢや。』

娘は悚然と身顫した。

爺は、それにも頓着なく、

『相手は先づ恁うもあらうか……、』

と又一枚女の繪……、女郎の風をして居るらしい。

『職人は朔日十五日と云ふぢやで、先づ此二日が附目かの、食雜用を差引いて、殘

が二兩もあらうかの、其金を持つて、恁う行くぢやで、女も恁う太つて居るわ。でッぷりとの、脂切つて……。此女が何處の馬の骨とも知れぬ、田舍者と來て居るわ。

だゝアやがアま處かい。磨も餘程懸けいでは、芬と來やうと云ふ代物さの。服裝を見さつし、此の服裝を！』

と、爺はべとりと繪具を附けて、眞紅に塗つたは女郎の着物。其處へ黃色で瀧昇り、紫の太い襟、大一番の大兵庫、いや奇怪なる化物かな。

『此の又面が容易でないわい。先づ恁うもあらうかの、』

娘は思はず面を背けた。

『其でも抱いて寢ると可愛いとよ、喃……。一月半月分の稼溜をば、棒に振つて出懸けて行くわ。翌日は突財布さの……。』

又、トッチンカン、トッチンカンと、鐵挺の音が響く。

『今朝も横町の床屋へ行くとの、パタリ〳〵と云ふ草履の音ぢや。何うしたものかと思うて見るとの、亭主が、お前、太年を仕りやがつて、何の事はない、女郎氣取ぢや。褄こそ取らね、髪こそ結はねさ。洋服擬の白シャツを着て、あの、一尺もあらうと云ふ、高い草履を穿いて居るわ。然かも其の穢い事！

女郎の足で脂切つて、蓬毛立つて、眞黑になつて、持つたらべとりと來さうなのぢや。青い唐天のすがつた奴……。

それを穿いてパタリ〳〵よ。

掃溜へも捨て兼ねるやうな奴を、有難く押戴いて、頂戴に及んで來たものと見える。

道理で……仕事は拙いと思うた。

昨夜氣で、目は腐うて居るわ。

人の面へ生欠伸を吹かけをる。

剃刀は立たず、鋏は切れずの。剃つた跡が、毛が殘つて居て、其で居てビリ〳〵と痛いわ。

や、それでも職人かい。

家へ歸つて、睡い目をこすり〳〵、猶旦燻つて稼いで居るわ。

いづれ馬でも引張つて來たぢやらうでの。其の穴も埋めにやならずか。又今度の十五日があるわ。

お酉樣も近うなるでの、』

爺は又べとりと筆を、

『今頃は然ぞ思ひ出して……、昨夜は恁うもあつたらうかの、』

娘は又身顫した。が、爺はさら〳〵と描いて了ふと、熟と見て、にやりと笑つて

『馬鹿な奴等ぢや。』

と冷笑つた。

『偖て、今度は何を描かうかの。當世流行の女優にしやうか、それとも高襟にしやうかの。何が可い？』

と、娘に相談。爺は一服呑むで了ふと、自分も凝と首を傾げて、紙面を瞶めて老へて居る。

娘の顏は色蒼褪めて、さしも麗はしかりし頰の色も、次第々々に色褪せつゝ、唇の色さへ變つた。

愁ひに窶れし其の面影は、譬はゞ湯上りの温氣醒めて、寒氣一時に身を襲ひ來たるものゝ如く、又薄紅梅の色霜に痛みて、萎まんとする風情に似て居る。

待女郎

『御免遊ばせ、御免遊ばせ、』と些と尻上り、

『今晩は、今晩は……、』とやゝ尻下り、優しい聲と、憎體な聲とを、兩樣に遣ひ分けて、薄氣味惡くも訪ふ者がある。

玄關は素より暗くて、灯も何も點いては居らぬ。と、爺は氣が着いたか、唐突の潜り戸の音に、吃驚して卦算を取ると、描きかけの繪をサラ〳〵と卷いて、前後左右を振返つて見たが、描きも描いたり、いつの間にか、野分の跡のやうに散らかつて居るのを、這ふやうな手付で、彼方を押へ、此方を押へ、引寄せては重ねて、サラ〳〵と卷いて、卷いて了ふと、

『どうれ、』と言つた。

而して、毛氈の上の十燭の電氣を取ると、それを持つて、紙門を開けて、次の間へ出て、又玄關へ立ちはだかつた。

上框には婆が一人、前髪なしの小さな丸髷、髪はまだ黑いのが、衿の懸つた草色紬の半纏、唐棧縞の白ッぽい綿入、黑羅紗の前垂掛で、寒さうに手をスッ込めて立つて居る。

爺は見ると、

『狸か？』と一聲。

『エヘ、、』

と薄氣味の惡い笑ひやうをしたが、鐵漿をつけた大きな口で、

『今晩は、何うもお寒うございます。』

『私は又誰かと思うての、慌てたのぢや、』

『いひ、、、、』

婆は又妙な笑ひ方をした。

『何か用かの？』

『はい、何有ね、彼家樣へ伺ひました處が、此家樣にお在遊ばすさうで……。』

と、後は何やら目顏で知らせる。

爺は頷いて、

『いや、そりや何うも』と言つたが、

『さア〳〵まあ上らつしやれ、』と先に立つて連れて行く。

『それでは御免を蒙ります、』と上つて、其處等キョロ〳〵眴しながら、

『ま、結構なお住居でございますこと、御隱居所には丁度宜うございますね、』

『何有、手狹で爲やうがないのぢやが、』
と、奥へは通さず、茶の間へ通して、電氣は柱に引懸けて坐る。婆は又、
『早速ですがね、』と低聲に言つたが、後はムニヤ〳〵、ムニヤで解らず。
爺は耳を寄せながら聞く。ニヤリと笑つて、
『いや、そりや何うも、實は寢て居るがな、ま、起して見やう。』
『何うぞ一つ、然う云ふ譯なのでございますから、』
『はい〳〵、否、何、その御遠慮には及びません。』
爺は又立上つて、電氣を取ると奥座敷へ入つて行つた。
婆は又暗闇できよろ〳〵。手探りで莨を燻すと、トンと拂くも内端な音。眞暗な中に莨の火だけが紅い。

* * * * * *

『小夜や、小夜、小夜、もう起きさつしやい、何うしたものぢや、これお小夜。』
『は、はい、』と云ふも優しい返事。
娘は電氣を突付けられたも知らず、枕を脱して、恍惚と……、晒木綿の行火の内お召の服裝を、帶だけ取つて、蒲團も敷かず、毛氈の上へ直接に、その華車な身を横へたまま、寢る意ではない所を、つひうと〳〵と轉寢をして居たらしい。
や、暖う、ほんのりとして、花の顔、月の眉、夢見る如く恍惚となつた、美しさ又艶麗さよ。
結んだ唇も桃の莟の、開かば如何にと思ふ内、搖り起されて、清しい目。
娘は慌てゝ起返ると、
『寢ましたか、餘程……？』と聞く。
大胡坐で、

『いや、何、寢たのは幾らでもないがの……、』

お色直し

『何うぢや、少しは快くなつたか？』

『はい、』と娘はしをらしく、『お蔭樣で快くなりましたよ。』

『然うか、それはまあ可かつた。處で氣分は甚麼ぢやの？』

娘は鬢を搔き上げながら、

『別に何ともありません。』

爺は何と言ひ出すかと思つて、氣遣はしさうに見て居たのであるが、

『然うか、氣分も何ともない？いや、それは何より〳〵、』

と可喜しさうに言つたが、偖て又氣遣ひ、

『何うぢやらうの？』と恐る〳〵。

娘は、

『え？』

とその淸しい目を睜つたが、見られて爺は面目無げに、禿げた頭をすべりと撫で

て、

『追々暮も近くなつて來るでの、正月は餅も搗きたし……、お迎が來てるのぢ

やが……、』

娘は、

『何處です？』と機嫌好く。

是は又案外な好い返事。と思つた。

『行つてくれるか？』
『はい、參ります。』
『氣の毒ぢやな然し、』と言つたが、又禿頭をすべりと撫でゝ、
『いやもう、然う言はれて見ると、お爺さんも、喃、遣り度くないのぢやが……
來て居るのは煮染屋の小母さんで、斷るにも斷り難しの、それに、何しろ、今夜の
客と云ふのが、お爺さんではなけれども、』と又頭を撫でゝ、
『坊主なのぢや。是と來ると、何うもその喃、唯もう執着こくばかりあつて、餘り
香ばしくはないのぢやが……、何うやら今の話で聞くと、屹度二四六五三一……
今夜は夜明しらしいので、お酌ばかりで濟むかも知れぬ。然うすりや此方は、唯儲
……、小母さんの顏も立つか。然うしてくれゝば難有いのぢやが……、』
『參ります。』

爺はふと其顏を見て、
『行つてくれるか、ホウ、豪いの。』
娘は早や立上つて、帶を締める、扱帶を結ぶ、鬢の後毛を搔上げる。
爺は又熟と見惚れ、
『や、いつ見ても美しいの。その氣で確乎遣つてくれ。
世間の奴等は皆犬ぢや、猫ぢや、狸ぢや、獸ぢや。と云ふ事を忘れちやならぬぞ
晝間は、金襴の袈裟、法衣か。蟬丸のやうな帽子を冠つて、雪より白い羽二重衣
よ。拂子を持つて、水晶の珠數さの。金緣の眼鏡を懸けて、赧ら顏で、南無ウ妙法
蓮華經も口の內、お祖師樣と向ひ合よ。
カチリと遣ると、だゝぶだぶ〳〵、だゝぶだぶ〳〵。其に又一緒になつて、ぽん
がちやり、がちやり、などゝ遣る、銅鑼鐃鈸の靑坊主が居る。

此奴が又食はせもので、暇な時は沙汰もないのに、檀家へ御布施の催促に行くわ
五六軒廻つた所で、書生の服装で小塚原（千住）かい。
それはまだ好い内ぢや。中には和尚の居ない留守を見計らつて、門前の花屋が娘
を、二貫が所買食しをる。
五十錢の銀貨を出して、お剩錢がないと言はれたが、祝儀に遣るのも惜いもの、
お前様何うぢやなと、隣寺の納所が處へ行けば、其奴妙なり、三貫が處、では拙僧
が讓受け申さうと、此奴が又出掛けて行く騒ぎよ。
烈しいのは月拂さの。
女が又洒蛙々〳〵ものよ。
いや、檀那こそ好い迷惑……。
その面で、その體で、その手で、銅鑼ぢや、鐃鈸ぢや。

お燈明の心も切るかい。
御厨子の前には新佛。
七僧で貳拾圓、十僧で貳拾五圓、當山ではそれより下はお引受申されませぬ、ぢ
や。
商賣ぢやと思うてけつかる。
是ぢや佛も浮まれまいて。
夜半になると、ぞろ〳〵ぞろ〳〵、和尚の寢て居る枕元へ、骸骨が歩くと云ふが
……。
いや、それは嘘、それは嘘ぢやぞ。
それは一人で寢る時の事で、お前さへ、行つてる分には、那様事は毛頭ないのぢ
や。』

娘は顔色を變へたのであつた。
爺は失策つた！と云ふ顔色で、
『はゝゝゝ。那樣當事もない馬鹿氣た事が、今の世にあつて耐るものか。はゝは、』と又笑に紛らしたが、
『それに今夜は夜明しぢやと云ふし……、甚麼にかまあ景氣が好かろ。
屹度又、正面の、祖師堂の藏造りの中で、六七人も寄集つて、坊主頭に捻り鉢卷狐、ちよぼ一、五三一、五貫、十貫と場へ切つて、二四六搔拂ひか何か遣つてるんだらうが。
夜になると、その行狀ぢや。
此の分では、屹度何だな、今朝もお客樣(葬禮)があつたと見えるな。
坊主しこたま儲けたな。

よし、御布施は此方のものぢや。
其氣で確乎やつてくれ。』
と言つたが、娘が懷にせし懷中鏡、又拔き持つて、口紅を塗けるを見て、
『うむ、よくなつた、よくなつた、顔の色も引立つて見えるわ。』
時に暗闇から聲がして、
『お支度が出來ましたら、先方樣でもお待兼でございませうから』と言ふ。
爺さんは慌てたやうに、
『はい〳〵はい、はい唯今、』と言つたが、立たうとするのを、
『これ、』と呼留め、
『日來も言うて聞かす事ぢやが、甚麼處へ招ばれて行つても、必ず惚れちやなりませぬぞ。お前の其の姿さへ見せれば、甚麼男でも振返らぬものはない。と云ふ事を

忘れちやならぬぞ。』

と、娘の手を曳かないばかりにして、電氣を持つて送つて出る。

婆さんは、慌てゝ身仕度。煙草入を納つて了ふと、衝と立上つて、娘の背後へ廻つて、羽織の襟を直してやりながら、

『それぢや確にお預り申しました。』

『氣を付けて行つてくんねえよ。』

何寺かの鐘がぼをんと鳴つて、夜は是から更けるのである。

花嫁御

『やあ、相變らず綺麗ぢやな、』

濁を帶びた胴間聲と云ふ奴、てら〳〵と紅光りに光つた頭、鼻のしやくれた菊石顔、油で煮染めたやうにぴか〳〵するのに、滿面の菊石の跡が、一つ〳〵黑く凹んで、笑ふ時馬齒が黃色い。

其の碌でもない御面相を、大事さうに包んで居るのが、水色縮緬のごり〳〵した襟卷、大巾で一丈もあらうと云ふのを、ゆッたりと懷へ捻ぢ込んで、雪のやうな白羽二重の法衣、同じ襟を五六枚襲ねて、綾のある白七珍の卷帶、和尙は年紀の頃五十二三か、小山のやうに太つて居るので、些つとも年齡は分らない。

が、前面に經机、その前に電氣を置いて、机の上には法華經八卷、朱筆と朱硯、冷かな水晶の文鎭、青銅の水入もある。

又、下に敷いたのは、綿の厚さ一尺もあらうと云ふ大座蒲團。然かも緋友禪のゴリ〳〵した、見るからにけば〳〵しいので。右の脇には七珍の脇息、左の傍には金

蒔繪の火鉢。佐倉が赫々と熾つて居て、此處へ坐らせられたのが、今宵一夜の花嫁子のお小夜である。

又、お小夜からは正面の、九尺の床の間には、見上ぐるばかりの大きな懸物、それに大きく『南無妙法蓮華經』と髯題目が白字で書いてある。其の下には青銅の觀世音菩薩の像もある。

又、床の間の傍の違棚の上には、金縁の卷物數卷、折本もある、雜誌もある。花も室咲の梅が唐金の花瓶に、遠州流に活つて居る。

香爐はあれど、香は煙らず、見渡す限金襖で、違棚の傍に屏風が一双置いてあるが、それさへ金地へ七草模樣。碁盤もあれば、双六盤もあり、是で太刀さへ横へてあれば、何の事はない殿樣のお部屋である。

又、お小夜はお腰元に上つた態。

婆は犧を御供へ申した氣で、今し方歸つて行つたのであるが、和尚は早や舌舐ずり。

宵に食うたは鰯の沼田で、葱臭い噯を吹いて、ベラ〳〵に醉うて居るが、丸太のやうな膝小僧、白フラネルの腰卷まで出して、はや一向に他愛がない。

『何うぢやな、お娘、これ、お小夜さんや、もう些と此方へ寄らしやらぬか、夜風が寒うて身に染みるぢやでの、やれ〳〵これははや冷たい手々ぢや、恁う見た處何うも言へぬてや、うゝい、あゝ……、』

と又沼田の噯。

蛸が陸へ上つたと云ふ態で、その太つた體を上へ〳〵と搔り上げ、又骨無しのやうにぐつたりとなつて、經机に凭れ懸り、お小夜の顔を斜に眺めて、

『歌舞の菩薩の音曲かや、觀音樣の化身のやうでもあり、又、衣通姫のやうでもあ

るぞや。見れば見る程美しい、辨天樣も跣足ぢやわい。うはゝ、うはゝ、』

と和尙笑。

其癖客嗇で、大高の菓子一つ食べさせるんぢやないが、

『これよ、これよ、』

と納所を呼んで、

『もう寢るさかい、床を伸べての、』

『はい、』

と手を支く青坊主。障子一重の外は植込、お寺樣の有難さには、雨戸もなくて板緣ばかり。

松、梅、櫻、芭蕉の葉も、あるらしい冬の月夜。

竹は手近の鉢前まで來て居て、灯が映るとさら〳〵。

竹緣には衝立のやうな手拭掛。

それさへ蒔繪物の贅澤さよ。

納所は鐵行燈を提げて行く。

角隱し (一)

『わッ、わッ、わッ、わッをう……』

と犬の遠吠。

上野へ着く終汽車が、轟……轟……轟……と轟く。

谷中初音町の大妙寺、門前の腰掛蕎麥屋、表の格子に『生蕎麥』とあるのを、暖簾を潛つて入つたお客で、煙草も呑めば酒も呑み、そしてお剩によく饒舌る、四十五

六の婆がある。

薄ッぺラな格子縞の、煎餅蒲團にキチンと坐つた、樣子こそ克明らしいが、何うして中々一筋縄では、行きさうもない婆さん。

膳の上に並んだのは、二合徳利で七八本、もりの殻が唯た二つで、鐵拐味噌を箸の尖へ塗けては、ぺろりと嘗めて、又チビリとやり、

『明朝お參詣の振をして、出て來るから御覽なさい。先づ自慢ぢやないけれど、此處い等にやあ居さうもないね。

尤も淺草中捜し廻つたつて、あれほどのは珍らしいので、吉原にさへ居なからうと云ふ評判。

柳橋の櫻家さんからも、一萬圓で何うかなんて、いつか、然る大盡から頼まれて園者にし度いッて、おいでなすつたけれど離さず。

嫁の口は降る程あつて、支度は皆な此方でして、親達にも苦勞はさせない、勇姑と一所に居るのが厭なら、別に一軒家を建てゝも可いと、云つて來ても離さずさ。

『貴方の方でもし御承知下さらないとなると、大事の若樣がお亡りになります、乳母の私を助けると思召して、何うか御承知をなすつて下さい。』

なんと云ふ古風なのがあるかと思ふと、自分で直接に名刺を持つて來て、

『僕は何々新聞の記者ですが、親御さんに少々内談がありまして、』

なんて、紋附袴で、お抱俥で、髯を生して、飛込んで來る。なんと云ふ圖々しいのがありますね。

『嫁さんの分として、幾ら〳〵財産を分けるから、伜もあれほどに懇望して居りまして事ですから、何うぞ其で御承知をなすつて……』

なんて、幾度も〳〵頼むやうに申込んで來る品の好い夫人がある。

何しろお前さん、年紀が十九で、器量が好くて、品が好くて、優しくて、仕事が出來て、藝が出來て、情が深くて、意氣で高等でしなやかで、親孝行と來てるから耐りませんやね。

お爺さんお婆さんの居ない時は、仕方がないから店へ出て、帳場格子の中へ坐つて、お裁縫はして被在るけれど、近所の、あの通り亂暴な若い衆だつて、誰一人寄付きやしない。

往來の人も立停つては見たり、振返つては見たりして行くばかりで、例令品物は買ひに入つても、

『へい〳〵、何うも、恐れ入ります。』

なんて、お客の方から挨拶をして出て行くゝらゐなもの。

威がお在んなさるからね。

その癖、優しくて、仇氣なくて、可愛くて、仇ッぽくて、顫ひ付き度い程に思ふくらゐですが、何う云ふものか、傍へ行くと、私達でさへ頭が下るの。

何か一言言はれる度に、『はッ』と云つて畏り度くなるの。

何うしてあんな娘が出來たものですかね。何でも餘程好い方の、落胤だと云ふ事は、兼々から聞いて居ますが、然うでゝもなくちやあね。第一あのくらゐ品の好い娘が、那麼薄穢い爺さん婆さんの、血統に出來やう筈もなし、亦、兩親のお墓さへ何處のお寺にもないのが不思議。

それから、幾ら場所が場所で、向うの酒屋の娘も出れば、隣りの古着屋の娘も出る、横町の煙草屋の娘も出れば、裏の炭團屋の娘も出るで、旦那取をする、藝妓に出る、妾に出る、女郎に出るつたつて、何も好き好んで那麼好い娘を……、それ

も掛換があるんぢやなし、嫁に貰ひ人がないんぢやなし、賣物になんか出さないだつてと、私達は思ふんですがね、』

婆さんは、ぐびりと一口。

『何う云ふものか、其の爺さんが、頑固で、中々承知しやしない。

而して、思切つて妾に出すぢやなし、お嫁さんに遣るぢやなしゝて、家に置いてはチビリ〳〵と、儲けさせて居るのですが、此又チビリが大したもので……。

馬鹿な奴もあつたもので、私が知つてからも四五年になりますが、其中に、其の娘さんの爲に、詐欺をして懲役に行つたのがある、首を縊つて死んで了つたのがある。

親達に劍突を食つて、勘當をされたのがある。

東京にも居るに居られなくなつて、青島とかへ逃げて行つてるのがある。

乞食になつて歩いてるのがある。

川へ嵌つて土左衛門になつたのがある——土左衛門はまだ少年なので……。』

『眞逆……、』

と亭主は噴出した。

『何ぼ女が好いたつて、ね、女房さん、』

と女中も笑つた。

角隠し（二）

女中は上框に腰を掛けて、火鉢に煖りながら聞いて居る。

女房は火を落して了つて、勝手の方を片付けて居る。

亭主は乃ち帳場の中で、帳面を調べて居る。
時計は十時に垂々として居る。
亭主の上の延起棚には、燈明が點いて居て、一の酉に買つて來たらしい、大きな熊手が翳してある。
婆の傍には朱塗の蒸籠が、山のやうに積上げてある。
婆さんは又チビリと一口、
『其れがと云ふと、お嫁さんに出さないんぢやない。又お妾にも出さないんぢやない。藝妓にも、雛妓にも、出した事はあるんですよ。
けれども、其處は腕で、行つたかと思ふと歸つて來る、出たかと思ふと歸つて來る、死んだかと思ふと、生返つて來る始末でね。
柳橋へも、半年ばかり、雛妓で出て居た事があります。

新橋へも、一年ばかり、藝妓で出て居た事があります。
お嫁にばかりも二度行きました。
お妾には四度か五度。皆其度に家を作へて貰つてね、女中を置いて、猫を置いて殆と玄冶店のお富さんといふ構へ。
又、お嫁にも、行けば行つたで、ちやんと支度もして行くんです、お仲人もあつて行くんです。
一度なんか、隨分立派なお支度が出來ましたよ。
それこそ簞笥長持でね、裲襠を着て、角隠しで、白無垢で、緋縮緬の下着で、黒繻子の丸帶と云ふ姿で、それは甚麼に好かつたでせう。
尤も支度は皆先様からして下すつたんですけれど……。三筋町の、あの通りは動けないやうな見物人。

店々では、一軒殘らず、提灯を出しますね。町内からは、紋附袴で、定紋の附いた弓張を持つて、主人が皆送りに出る。

俥の數さへ三十臺と云ふ騷で、黑山のやうな見物人の中を、お小夜さんは馬車に乘つて、キラ〳〵キラ〳〵煉つて行くんです。

その立派さ、神々しさ。私はあれがいつものお小夜さんかと思ふと、硝子の中を透して見るのも、何だか體が居竦むやう。

嬉しくて、思はず知らず、涙が出ました。

先へ行けば、先へ行つたで、お供の人の話で聞くと、お玄關には敷石が敷いてあつて、馬繋ぎさへあつたと云ふ事。

大した出世ぢやありませんか。

電氣は宛で晝間のやうに、此處にも彼處にも點いて居て、金地に松と鶴と龜との

衝立が立つて居る。

其傍に、紋附袴で、洋服を着て、三枚襲で、白衿で、五つ紋で、ずらりずつとお迎が出て居る。

手を曳いて連れて行くのは、お仲人の奥樣で、是が又白衿、紋附、金鎖、裾模樣籠甲の櫛笄、丸髷で、紅いてがら。

金剛石と云へば、キラ〳〵するやうな手で、香水と云へば、芬々するやうな體で引張つて行くのださうですが、その方にさへお小夜さんは敗を取らず、その白無垢緋の下着の姿で、高島田を俯向けて連れられて行く。

先づ、お離座敷のお茶座敷で、紋附袴の御親類の方々の、控へた處で御小憩。

唯だ小間使の汲んでくれた、白湯に些いと口をお付けなすつたばかりで、直ぐにお髮直しの化粧の間へ。

それもお仲人夫婦が跟いて行つて、親切に世話をする。

まだ寒い時分でしたから、お小夜さんは、蒔繪の火鉢に、手だけ焙つて待つて居なさると、又、『此方へ』と云ふお聲が懸る。

お待女蔭に手をお引かれなすつて、お藏の前から、お廊下へ、お廊下から橋懸りへ。橋懸りから又お廊下へお出なすつて、何室にも此室にも白晝のやうに、電氣のかつかと點いた間を、旋てお二階の若旦那のお部屋へ。

暫く寂として、二階も階下も、鳴を鎮めて居る處へ、旋て、高砂や此浦船が聞えて來る。

偖てそれが濟むとお二階の大廣間で、御親類、親御さん達のお盃。

電氣燈のキラ〳〵する下へ、ずらりずつとお並びなすつたのは、皆御親類の方々で。その中央に島臺を置いて、お酌をするのは、女蝶男蝶。

熨斗の付いた銀のお銚子で、一人々々に三々〳〵九度。

お聟さんとお嫁御さんとは、お床の間の正面に控へて、是が又美しいつたら、譬に云ふお雛樣の御夫婦。

お小夜さんは、其時、牡丹色の裾模樣で、振袖を長く敷いて、羞含んで、俯向いた限、ぽつとして、顏も上げなさらぬ。

お聟さんは、キチンチャンとして、黑羽二重の五つ紋附、眞白の羽織の紐、パリン〳〵した博多平のお袴で、兩手を文紐へお入れなすつた限、是が又固くお成んなすつて、目を据ゑてお在なさらうと云ふ騷。

旋て皆さんのお盃が濟んで了ふと、それまで次の間に控へて居た藝妓衆が、是が又白襟紋附で、鼈甲の櫛笄で、金蒔繪のお膳を運ぶ。又お銚子を運ぶ。

鯛と云へば、海老と云へば、一尺二尺もあらうと云ふ、お見事な燒物籠を運ぶ。

白木の高臺のお引物を運ぶ。

お小夜さんとお聟さんとは、盛り限の、それもぱつちりしかお椀の底に入つて居ない御飯を、些いと一口召食つた限、柳箸をお了ひになる。

間もなくお仲人とお待女蔕とが、お傍へ行つて、耳打をして、それ、今度は水入らずのお床盃。と恁う云ふ順序。

素より御寢間は遠く離れて居て、お庭を隔てた向うの方。

お中二階の八疊敷。お憚も手近にあつて、水屋も階下にあらうと云ふ造作。

お火鉢、お茶道具も揃へてある。

六枚折の金屏風を、立廻したお床の間には、鶴と龜との米饅頭ではなくて、此處にも立派なお懸物。

暮近でしたから水仙が活つて、千鳥の香爐も置いてある。

萬事が昔の御儀式通りと來てるので、お枕元には犬張子、金蒔繪のお紙臺。

お夜具は素より眞綿の入つた、ふうわりとした緞子の夜具。

敷蒲團なら三枚も襲ねて、お枕までが金蒔繪さね。

私は話に夢中になつて、つひ言忘れて了つたが、それまでにお小夜さんのお召替が丁度四度。

一度はお色直しの時。その次はお盃の濟んだ時。それから今度で……。

それでお寢衣がと云ふと、是が又吾々風情の娘なら、餘所行にでもしやうと云ふ縞お召の袷に、友禪縮緬の長襦袢で、淡水色縮緬の扱帶さね。

さて、お仲人は宵の口、しッぽりとお寢かし申してさへ了へば、後はもう此方のもので、それからがお爺さんの仕事なんです。』

占めたもの

『えゝ？』

と亭主は聞耳立てる。

女中が乘出す。

女房が出て來る。

婆は醉が廻つたかして、猪口を置くと、刻莨をすぱ〳〵。言はずともの事まで言ひ出す。

『一月二月はまだ音無し〳〵して居ますね。三月となると、そく〳〵始める。先づ、言種は病氣ですね。

『お爺さんが、引付けさう！　昨夜から泡を吹いて、明朝にも死に兼ねない。不斷から心臟の病いのが、此の寒さ故急に來たものと見えます。大變だ！　それ大急ぎで！』

と、俥を持つて迎に遣ります。

お小夜さんは又、氣が弱いから、嘘だた知りつゝ、もしやに軀られて、心配さうな顔で來る。

歸るが否や、けろ〳〵として、お爺さんは、

『や、御苦勞々々〳〵、何うぢやな、矢張り、獸ぢやつたらう……。』

その獸にも譯があります。

『人間と云ふものは、皆な然うした淺ましいものぢや。那麼立派な、御殿のやうなお屋敷には住んで居つても、夜になると皆その通りぢや。何うぢや、愛想が盡きた

ちやらう。もう今日限り歸かんでも可い。家に居て遊んで居さつしやい。』

と、娘はそれなり留めて置いて、儲てお屋敷の方は何うするかと云へば、

『誠に永々お世話樣になりましたが、娘も厭だと申しますし、それに私の年紀も年紀、お姑御もお氣に召さぬと見えて、大層なお憎しみ……、』

と、何處でもある巧い處を捕へて、やれ、小姑が何うしたの、御親類が何う有仰たのつて……、『お聟樣には濟まないけれど、これではとても勤まりませぬに依つて、御緣のないものと諦めて、お暇を戴きます。』と云ふ……。

儲て、恁うなると又妙なもので、始めて貰つた花嫁子……、殊には容色が並勝れて居て、情が深いと來て居るから、親御さんは諦めても、お聟さんは諦められない。

『やれ、可哀さうだ。氣の毒だ。あれほどまでにして居てくれたのだから、是は本

人の心から出たのではない。

これほどの大きな身上、殊には男振には申分ない意だし、お母樣やお父樣も可愛がつて居なさるし、着たい物は着られるし、見たい物は見られるし、何處に一つ申分もない。

あれほどまでに仲好くして居たのに、あれほどまでに仲好くして居たのに、自分で可厭だなど、言ふ筈はない。

本人は來たがつてるのに、爺さまが引留めたのだらう。

可哀さうに、然う言へば、あのお小夜が、あの容色で、あの小さい胸を痛めて、ほろ〳〵〳〵泣いてるのが目に見える。

僕の事を思出して……。』

か、何かで、さア〳〵もう〳〵居ても立つても、居られなくなつて來る。

病氣になる。
耐らなく逢ひ度くなつて來る。
飛出して逢ひに來る。
お爺さんが又喜んで逢はせる。
お小夜さんが又、泣いて縋り着く。
『よくまあ達者で居てくれた、』
となる。
『私も逢ひ度うございました、』
となる。
『何だつて又、恁麼家に？』
となる。

『お爺さんが居るものですから、』
となる。
『手を切つたら何うだね、』
となる。
『然うすれば猶可いのですけれど、』
となる。
『幾らばかり要るのだ？』
となる。
『百圓もあれば可いのですけれど、』
となる。
『その位なら出さうぢやないか、』

となる。
『堪忍して下さいな……、』
となる……。
さアもう可愛くて耐らなくなつて來る。
お爺さんが緣日へ出て行く。
お婆さんが湯に行つて了ふ。
後は女中一人となる……。』

鳩

『さアもう恁うなれば占めたもので、お爺さんが緣日の植木屋を、一廻りして歸つ

て來る時分には、ちやんともう、好い工合に、話は出來て了つて居ます。
『ふむ〳〵、今更邸へも入れられないから、須賀町に圍つて置く？
成程月々五十圓で、それで何うにかやつてくれ？
お爺さんにも、お婆さんにも、決して出入をさせないやうにか……。
占めたな、今夜のお土產だつて、十圓紙幣を置いてッたか。
馬鹿奴！　髯なんぞ生かしやがつて、幾歲になる？　廿八か。
先が永いぞ、大事にしろよ、何うぢや、矢張り畜生ぢやつたらう……。』
と、爺さまは言つて聞かすのです。
そして、是は商賣で、色の爲に生計をするぢやなくて、生計の爲に色を賣るのぢや。
世間の奴等は皆馬鹿ぢや、阿呆ぢや、畜生ぢや。

と、言うては娘に聞かすのです。
ですから惚れもしませんわ、又……。
それにお小夜さんが柔順しいから、今だに男は恐いもの、神様佛様は尊いもの、觀音様は有難いもの、お爺さんは大事なものと、思つて居るから耐りませんや。
お爺さんの言ふ事なら、眞額正直一途に思つて、唯々てッちやア從つて居ます。
甚麼に色の生ッ白い、綺麗な男を當てがつたつて、立派な男を當てがつたつて、優しい親切なのを當てがつたつて、捌けた面白いのを當てがつたつて、惚れませんね、それは不思議。
その癖、縱令、甚麼厭な、お爺さん客を當てがつたつて、又太好かない親仁客を當てがつたつて、決して粗末にするんぢやなくて、出來るたけ大事にします。大事にはしますけれど、惚れませんね、それは不思議。

偶に私が笑談に、『貴女は甚麼方がお氣に召すの？』ッて聞いても、唯『ふゝん』ッて笑つた限、張合も何もないくらゐ。
その癖罪もない、仇氣ない、笑談も云ふ面白い人。
鳶が鷹を產んだと云ふのは聞きましたが、那麼方も珍らしいね。
女でさへ私は一緒に歩いてると、何だか恁う、肩身が廣いやうで、鼻が高いやうで、嬉しいやうで、手を曳かれるのが何より樂み。
人が見て然ぞ可羨しいだらうと思つてね。
那樣で居て、何が一番、その方の道樂かッて云ふと別にないの。
衣服も作へて上げれば着なさるし、髮も島田にお結ひなさいッてば結ひなさるし
お化粧もお爲なさいッてばしなさるし、芝居一つ見に行くではなし、寄席へ一晩出掛けるではなし、然うかと云つて食べ物道樂ッて云ふ譯でもないらしい。

ま、私の見た處では、一番お宮詣が好きらしいね。
緣日と云ふ緣日は缺かさず、お茶湯日と云ふお茶湯日は缺かさず、不斷でもふと思立つと、直ぐに淺草の觀音樣ですわ。
私もいつか一緒に行きましたがね。
一生懸命お詣をしてお在なさる、その御容子が御容子と來てるから、振返つて見ないものなし。
『はゝア是は囮に出なさるのだな』
と私は其時然う思ひましたが、私の傍に居るのも忘れて、一生懸命拜んでお在なさる所を見ると、何うやら然うでもないらしい。
『それとも罪障消滅の爲かな、多度男をお殺しなさるから』
と思つても見ましたが、何うやら然うでもないらしい。

何か知ら、深い希望があつて、拜んでお在なさるものとしか思はれない。
『何を那樣にお賴みなすつたの？』ッて聞くと、
『否、何、何でもないの』ッて、笑つて、その後は何にも言はずに、時々涙含んでお在なさる事さへあるのです。
而して、氣を紛らさうとお思ひなすつてか、――鳩に豆を遣るのがお好きで、
『小母さん、豆を遣りませうよ。』てッちやあ、可愛いゝ蟇口を帶の間から出して、豆を買つて、鳩に豆をお遣んなさるのです。
鳩が又嬉しさうに、お小夜さんが撒いたと思ふものだから、廂からも欄間からもバタ〳〵〳〵飛んで來るんです。
そしちや、ク、ウ、ク、ウ、なんて、喜んで豆を拾ふのを、お小夜さんは見て、嬉しさう。

『小母さんも撒いてお遣んなさいな。』ッて有仰るから、私も貰つて撒いてやりましたがね。

其時ばかりは子供になつた氣で、家の事も何も忘れて了つてるのです。

その癖鳩は些とも寄つて來ない。私の豆は食べませんでしたね。矢張り罪障が深い所爲でせう。お月樣幾つぢやないが、皆な逃げて了ひました。』

狒々入道

『はゝは、』

と亭主は笑ひ出した。

『惡い事は出來ませんね、』

と女房も微笑むだ。

『明朝は樂みにして居やうや、』

と女中は又莞爾々々して居る。

婆さんは、楊枝を襟へ差して、莨を納つて、身支度をして、

『何うも飛んだお饒舌をしちまつて、お店のお邪魔を致しました。ま、その意でよく見て上げて下さい、自慢ぢやないが、目が眩みますよ。』

亭主は又愛想よく、

『いや、其奴ァ御親切に有難うございます。』

『何うもね、美い女の子となると、幾歳になつても惡くないもので……、』

『然やうさ、で、そのお嬢さんのお歸りと云ふのは？』

『ま、十時にもなりませうかね、』

『何れ俥で、お參詣の風をして……。成程ね、』
亭主は首を傾けて考へたが、
『有繋其處等は黒人でげすな。だが、解らねえのはそのお爺さんさね。一體平常は何をして食つてるんです。』
『今言つた其の畫工をして、』
『はゝあ、畫工が本職で、婆さんは生藥屋か。子供が出來りやあ譯はないね。へん何處までも巧く出來てやがる。』
『それはもうお手の物です。』と婆が言つた。
『そして、その婆さんと云ふのは？』
『それがさ、永年交際つて居る、私達にも解らないのですがね、婆や〳〵ッて言つてお在なさる所を見ると、連合では素よりないのです。』

『はつてね、それぢやあ雇婆さんでゝもあるのかね、』
『ま、私の考へぢやあ、其處い等だらうと思ふのですよ。お爺さんとは宛で他人です。口の利きやうもへい〳〵ッて愼んで居なさる所を見ると、』
『妙だね、愈々解らなくなつて來た。』
婆さんは勘定をして了ふと、古風な黒縮緬の頭巾を冠りながら、
『ですが、其寺の狒々殿も、中々隅には置けない人さね。あれで居て、お前さん、藝妓買はする、女郎買はする、圍者は置く、梵妻は置くさね。昔は鎗の一本も立てて、お駕籠で煉つたものだと云ひますが、御代が開けて來ると豪儀なもので、それが皆大ッぴらなんだから驚きまさね。
今夜はまあ、好鹽梅に、家のお孃さんが空いて居ましたから可ござんすが、お小夜さんでも空いて居なかつた日にやあ、お寺は宛で化物屋敷。暗でさ　それこそ亂

厭でさ。

天井ぢや鼬が駈けずり廻るし、本堂ぢやあ鼠が暴れ放題。奥の院では、藏造りの中で、納所連が捻り鉢巻で、丁半をおッ始めるし、屋根では貂奴が鳩を狙ふし、縁の下では乞食が寢るしさ。

蛙は飛出す、蛇はのたくる、庫裏では猫が踊を踊る。

方丈の疊は芒が生へないばかり。

お燈明の火は點しッ放しで、四邊近所は物騒なり、卵塔場では燐火が燃え出す。

庭ぢや赤子の泣聲がする。

狒々殿は一夜だつて、獨りで熟と寢られるんぢやないから、毎晩俥で下谷へ出掛ける。でなければ吉原へ行くさね。

幾らお布施が上つたつて、耐つたものぢやありませんわね。

ですから御覽なさい。あの山門だつて、いつか中から普請をする普請をすると云ふ觸込ばかりで、未だにあゝやつて足場がしてある限、屋根では蟀が鳴て居ます』

帳場の亭主も感心して、

『成程ね、然う言や美しいのは奥書院ばかりで、方丈の高天井なんざア、初中終貂が面を出して居ます。』

『雨でも降つて御覽なさい。柱にや一尺ほどもあらうと云ふ、大きな蛞蝓が這つて居まさ。

猫は居ても鼠は捕らず、鼬が代理を勤めやうと云ふ騒ぎ。』

『犬は居てもお寺にや居ずかね。成程然う言やあの通り、家の土間へなんぞ來て寒さうに蹲んで居ます。』

『でせう。いつかも寺男の松どんが、臺所の板敷の上で柏餅になつて寢て居ると、

何だか知らないが冷たいものが、ぞろ〳〵と這入つて來るから、はてなと思つて蒲團を上げて見ると、其奴が五六尺もある長虫でせう。

『御前がお好色で被在るものだから、長虫までが寂しがりやがつて、私處へ這ひに來ました。』

なんて松どんは笑つて居ましたがね。

何うして〳〵此のお寺の御前樣と來た日にやあ、昔から名題のもので、私達の仲間にだつて知らないものはありやしません。

『何うだ、一晩？』てば、大概な娘は、手を振つて逃げて行きます。

それこそ靜御前のやうなあのお娘でもなくちやあね。』

『何の事はない、平家の入道清盛と云ふ柄さね。はゝゝ。其處で相手が靜御前か、へん、源平盛衰記と來てやがる。』

『何だか知りませんが清姫のやうで、私やお可哀さうでなりません。』

『清姫と云ふと？』

『お小夜さんの事さ。』

『うゝ、安珍ですかい？ 大違ひ。あれはお前さん、坊主の方であの娘を嫌つてるのだアね。それからの大騒さ。』

婆さんは漸と下駄を穿きかけて、

『何でも好いから、蛇體にでもなつて、締め殺してゝも遣ると宜うござんすね、あんな坊主……、』

『私やあ又和尚さんの方で、狒々にでもなつて食殺さなければ可いがと、そればつかり心配してるんです。』

『滿らないのは私達ばかりさ。』

と、飛んだ處で女房が妬く。
女中はいつの間にか早やこくり〳〵。
大笑になつて、婆は出て行かうとしたが、暖簾を潜つて、又店を覗き込んで、
『然ぞ今頃は……、ねえ女房さん、』
と、意味有りげにや〳〵笑つて、
『ま、貴女も其氣で御折角……。』
と出て行つた。

夜更の饂飩

『太好かない婆さんだよ。』

と、女房は後形付け。亭主は、
『何うも飛んだ失禮を、』と言つて、煙草盆を押出して來たが、上框に座を占める
是より先、此處の蕎麥屋には、入口の土間を隔てた彼方の、蒸籠の前に腰を掛け
て、夜更の饂飩を啜つて居た、一人の客人があつたのである。
婆さんが出て行つて了ふと、
『今夜は大分御緩りでございましたね。』
と女房も愛想を言ふ。
『相變らず御勉强で？』
と、亭主も一服付けながら聞く。と、
『は、いや、何、』
と微笑んで、箸を擱くと、膝の上。身には大島の着物、黒紬の紋附の羽織、鼻下

には美しい八字髭を生した、細面の、色のくつきりと白い好男子。名を前島光起と云つて、此處の前の大妙寺に、下宿をして居る醫學士であるが、瑩澤しい五分刈の頭を上げると、

『勉強と云ふほどでもなかつたのですが、時ならない時分に腹が減つて來て、急に饂飩が食べ度くなつたものですからね。』

『はゝゝ、』

と亭主も可喜しげに、

『可うこそ、何うぞ澤山に召食つて下さいまし。』

『然ぞお可煩うございましたでせう。』と女房も言ふ。

『はゝゝ、』と前島は笑つたが、『いや、却つて面白かつたです。』

亭主は何を感ずつたか、

『本當にな、貴方がたのやうな先生方になんぞ召食つて戴くと思ふと、手前の饂飩も名譽とやらでございますが、同じ食べて頂くにしてもですな、今の話の御寺の御前樣になんぞ食べて戴くと思ふと張合がございません。先生の前ぢやございますがね、あの方達やアお前さん、食へば食ふだけ飛んでもない精分を増すばかりで、何の役にも立つのぢやございませんからね、はゝゝ。

いや、お宅の和尚さんの惡口なんぞ申上げて、恐入りますが全くです。第一佛樣の爲にもよくない。又、檀家の方達にも濟まないやうな譯で。私處の玉子とぢをばかり食はせたものだから、和尚さんの精分ばかり増して、お祖師樣は粗末にする、先祖の位牌を穢して了ふと、恨まれたつて仕方ござんすまい。御贔屓は辱いが、以來は出前をお斷りしやうかと思ふのですが如何なものでせう、』

女房は笑を忍びながら、

『そんな馬鹿な事をお前さん、』
『何故、伺つちや惡いかア？』
『先生が御笑ひなすつて被在るぢやありませんか。』
『成程、是は大失策、はゝはゝ、』と笑つたが、又、
『ですがね、先生、先生の前ぢや御座いますがね、全くでさ。折角私が骨を折つて打ちましたものを、滿らん蕎麥ぢやございますがね、那麽和尙さんに食べられるのかと思ふと、全く好い心地は致しません。
同じ食べて戴くにしても、先生方のやうな方に召食つて戴くと思へば、きびゝとして好い心地です。
妙なもので、心地だか何だか知りませんが、汁加減も美味く出來ます。而して、少しでも是が御勉强の御氣紛れになるのかと思ふと、何だか恁う、嬉しくなつて、

自分で學問は出來なくても、貴方がたに代つてして戴くやうな氣がして、何だが恁う好い心地なのです。』
『宿ともいつも然う申して居るのでございますよ、よくまあ恁麽穢らしい店へつてね、』
『全くです、永年御贔屓に預つて居るお客樣も大勢ございますけれど、全く先生のやうな、』
『お湯ですか、はい。』
と女房が取りに立つ。
前島は、些と極りの惡さうに、
『白！』
と足下なる犬を膝の間に引挾んで動かせず。犬は拔けんと身を焦つて、可愛くも

尻尾を振る。

亭主は笑ひながら見て居たのであるが、白犬が衝と逸れると、

『何うぞまあ御緩りなすつて、まだお早うございます。』

前島は湯を呑んで了ふと、

『どれ、歸つて寢る支度でもしませう。』

と、帽子も冠らぬ無雜作なりで、薩摩下駄を突懸け樣に、敷島を袂へ投げ込み洋杖を持つて立上ると、又土間なる『白』を振返つて、

『おい！』と呼んだが、『お世話になりました、』と唯一言。云ふが否や戸外へ出た。

『白』は後を追駈けて行く。

亭主は上から、女房は土間から、倶に暖簾を分けて見送つたのであるが、時に朦朧として月影暗く、寺内は唯見る、陰々として、幽冥の氣人を襲ひ、梢を渡る風さへ寒げに、見上ぐるばかりの山門の足場も、蜘蛛の巣に似て物凄まじく、鐘樓は高く闇に聳えて、鐘や魔ると小夜更けたのである。

けれども、前島の着た紋附の姿は、その後を追ふ白犬と倶に、何故かくつきりと際取つて鮮明に見え、敷石を蹈む洋杖の音も、からりころりと冴え渡つて聞えたのである。

誤診

『時に今日不思議な事實を然る處から聞いて來たんだがね、』

飲掛の麥酒を卓子の上に丁と置くと、半巾で髭の邊りを拭ひながら、恁う言つたのは大井と云ふ法學士である。

それと卓子を隔てた彼方に、肉汁を啜つてゐた月島醫學士は、

『何だ？』

『前島が何故細君を持たんかと云ふ事實ぢや、』

『ふうむ、』

大井は又ごくりと一口。

『僕は先づそれを言ふ前に、前島が何故醫科になり居つたかと云ふ、動機から話さにやならん、』

『それは僕も知つてるさ、母親が子供の内に肺病で死んだ事だらう。』

『いや、それもあるがね、實は其事に就いてぢやよ、程餘面白い話があるのぢや。』

と言ひ出したのは恁うである。

それは丁度前島が、小學校を卒業したばかり、謂はゞ未だ腕白盛の時。……

横笛の名人だつた、彼の父の工左衛門と云ふ老人が、肉腫と云ふ難病に罹つて、死んで了つてから間もない事……。

元親父の工左衛門同樣、舊藩主に抱へられて居た、梅田信齋と云つゞ、其髯の長いこと、繪に描いた鐘馗のやうなのが、維新後藩公から解雇されて、城下でも目抜の場所、大手町と云ふ處へ、自費で建築した私立病院を、そのまゝ受繼いだのが梅田の子息で、名を信吾と云ふ私學出の醫者であつたが、舊弊な連中は、同じ私立の梅田病院の向側に、煉瓦造りの宏大な、市立の病院のあつたにも管らず、何でも此の先生でなくてはならないと云ふので、引きも斷らず診察を乞ひに出掛けたものであつた。

前島の父も其の一人で、無論此の先生とも、元から懇意な中でもあつたが、前島が親父の手を引張つて、始めて診察を乞ひに行つた時の事。

先生、何か鹿爪らしい顔で、良暫く親父の肩先の腫物へ、指を觸れて見て居たが、二言三言話してる内に、突然、親父の肩先の腫物へ斬付けた。

亂暴と云へば亂暴、今考へて見ると無論無法だが、本人は一廉氣を利かせた意だつたのである。

處が前島は驚いた。

が、親父の眞蒼になつた顔を見ると、先生何か哄然と大笑しながら、手早く助手に繃帶を命じると、

『いや、御心配なさる事はない、毎日石炭酸で洗ひさへすれば可い、其内には屹度治る。』と言つたので、前島も安心して歸つて來た。

偖てそれからは毎日々々、其の所謂石炭酸なるもので、洗つて貰ひに出掛けたが何しろ病院に行く度毎に、出血が容易でない。家へ歸ると發熱する、疵所が痛むと

云ふもので、思なしか腫物さへ、漸々大きくなる樣子。

先づ是に一驚を吃して、病人の親父よりも、看護人の前島の方が、繃帶を取換へる毎に、蒼くなつて、驚いて、親類へ駈付けた。

而して、自分では言へないから、叔母さんから言つて貰ふ事にして、それとはなしに親父の舊弊を止させて、當時極めて評判の高い、市立病院へ行かせる事にした處が當時の市立の方の院長は、竹村幸藏と云ふ外科の名醫で、此人に診て貰ふと、一見して眉を顰め、

『飛んだ事をして了つた。』と言つた。

復讐

それがと云ふと、此の肉腫と云ふ病は、毒を盛つた嚢のやうなもので、最初から巧く手術をして、根扱ぎ肩から抜き取つて了ひさへすれば、何の事はなかつたのである。が、何しろ其の毒嚢を、梅田は突破つたのだから耐らない。

市立の病院に行つた頃は、ハヤ全身に毒が廻つて了つて、手も付けられなくなつて居たのである。

日毎夜毎に張り換へる膏薬さへ、唯病人へは氣安めの爲のみと云ふではないか。

親父は——然らぬだに、いつまでも、恁麼田舍に埋木になつて、果てやうとは思はん、是非今一度は東京へ歸つて、一旗上げずに置くものか。と口癖のやうに言つて

居た折からではないか。

子供心にも前島は口惜しがつて、親父が安眠をした隙を見ては、小學校で習ひ覺えた、駈足の足取で、菩提所の母親の墓へ、寒卅日の跳參りをした。

けれども父親は死んで了つた。

而して、『手遅れにさへならなかつたら、必ず助つたであらうに、』と言つた、竹村醫學士の語だけは、肝に銘じて忘れなかつたのである。

親父が長の疾病に、今はハヤ大方は賣盡して了つて、簞笥の中も、空しくなつた中に、唯一つ、是は母親が都落の時、胸高に締めた錦の帶の間へ、差して來た守り懐劍があつた。

前島はそれを引出して來ると、内懐ろにしつかと納めて、赤本の繪を其儘に、小さき武者修業と云ふ扮裝で、尋常小學以來の古袴を穿いて、梅田病院へ出かけて行

くと、先づ受付の禿頭には、『僕はお腹が痛むんです』と斷つて、旋て自分の番に當つて、院長の傍に呼ばれて行くと、突然その懷劍を引拔いて、院長に斬付けた。

が、對手が子供だから耐らない。

『何をこの小童奴が！』か何かで、助手の某に抱留められると、其儘ヒョイと掬ひ上げられて、大玄關から『一昨日來い！』と突出された。

而して患者の待合室からは、哄と云ふ笑聲が崩れたのである。

有繋の勇士も辟易して、其時は其限りで、預けられて居た親類の家へ歸つたが、偖て再た、何がな好い工風をと、色々苦策を廻らした末に、ふと思付いたのが梅田の邸へ火を放ける事である。

尤も院長の宅と云ふのは、前島とも同町内で、腕白共が遊び處であつた。

そして乙劍神社と云ふ、神社の森の奥に、高さ一丈二三尺もあらうと云ふ、生垣

を結ひ廻らした、城下でも屈指の屋敷であつた。

何からそんな事を前島は思着いたかと云ふに、當時前島の故郷では、近在の飢饉が原因で、至る處に放火の噂の絶えなかつた時だつたので、前島は、大膽にも、然う云ふ事を思ひ付いたのである。

屋敷は素より前島も一二度は行つた事がある。で、案内は心得て居る。

何處から忍んで這入つたかと云ふに、生垣の根に、犬の出這入る、大きな穴が開いて居た。

前島は其處から入つた。

而して用意のマッチを摺ると、山のやうに榾の堆く積上げてある、物置小屋の柴へつけた。

而して逃げた。

築山の上で見て居ると、庭中の木や草が、皆一面に紅く、火になつたかと思はれた。

物置は焔々と燃え上つて、嗟呼湯殿の廂へも燃え移らうとした。

途端に、

『石油だ〳〵！』

と叫ぶ者がある。

『水では可かん！』

と怒鳴る者がある。

瞬く内に、五人十人、森の中から現れて來て、しゆッぱち〳〵と音しては燒拔ける、凄じい火勢にも怯げず、焔の中に飛込んで行つては、武者は礫を拋ち、或者は棍棒を揮ひ、又或者は錆刀を打込みなどして、物置は火ながらに、メリ〳〵と音し

て薙倒れた。

而して、薙伏した火の粉の山に、手桶の水を持つて行つて注ける時分には、庭中はハヤ黑山のやうな人集りで、巡査も警部も、弓張を持つて、八九人は其中に居た。

が、其儘逃場を失つて、茫然、築山に彳むで居た前島は、見舞の客も一人去り、二人去り、皆祝の言葉を述べて居なくなつた時分、突然家人の手に捕へられた。

幼馴染

けれども前島は救はれた。

前島は、其時こそ、放火小僧であつたけれども、以前は笛吹の子の『光ちやん』であつた。然かも彼は江戸ッ子であつた。

同じ此處の町内にも、數多い腕白も居たけれども『光ちやん』ほど目の清しい、髪の黑い子は居なかつた。

又、大勢の子供達は、風を望んで梅田の邸へ、果物を貰ひに行つたけれども、前島だけは其の仲間外れであつた。

服裝こそ悲境に陷入つて居た折からなので、他の近所の子供達には、及ぶべくもなかつたけれども、然かも猶、目の清しさと、色の白さと髪の黑さと、東京言葉の美しさとは、他の子供達は及ぶべくもなかつた。

長町と番場町と、處こそ異りたれ、學校の往復には、いつも侍女を連れた梅田の娘と、風呂敷包を背負つた前島とは、神社の前で行會つて、ふと立停つては見送られ、見送りつして居たのである。

放火小僧の前島が、機を得て生垣の破れ目から、犬の如く逃げ出やうとした時、

無手と襟首を捕へたのは、萬一を慮つて、提灯を持つて屋敷の周圍を見廻りに來た、三右衞門と云ふ門番の大親仁であつたが。彼が勝手口へ引摺り込まれて、書生の某、車夫の某、執事の誰彼に袋叩きにされやうとした時、ふとその物音を聞付けて、バタ〳〵と奥から駈出して來たのは孃で、其の痛々しい少年の有樣を見ると同時に、忽ちわつと云つて泣出して了つたのである。

而して、誰が何と云つても、孃は前島を擲る事を諾せなかつた。

其内主人の信吾がやつて來た。

而して前島から白狀の言葉を聞くと、忽ら磴と手を拍つて、自己の誤診に思ひ至つた。

何が僥倖になるか解らないもので、無論警察へ引渡される事とばかり、覺悟をして居た前島は、梅田の娘の爲に救はれたのである。

然かも前島が救はれたばかりではない。
纔かの此の放火小僧の、笛吹の子の光起が、自分を父の仇だと言つた、其の罪もない少年の言葉に感動して、梅田は又、其限自分の病院を、市立に寄附して了つたのである。
又、前島は其儘梅田の屋敷へ引取られる事になつた。
『それほど親父の仇が討ちたければ、一生懸命になつて勉強をしろ。そしてお前の兩親を殺した、病の神を亡ぼして了へ。學資は俺が出してやる。』と、茲に不倶戴天の仇は、忽ち一變して大恩人となつて了つたのである。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

月島は驚いて、

『ふうむ、そんな事は始めて聞く、あの柔順しい前島に、そんな時代もあつたのかね、』
『いや、尤も其時代は、隨分惡戯な餓鬼だつたさうだよ。向う不見のね、やんちやんのね、しやうのない暴れ者だつたんださうだ。』
『はゝゝ、今見ると然うとは思へんがね。』
と月島は金口に火を放けて、
『然しその梅田とか云ふ醫者も、一寸變つた男ぢやないか。』
『無論變つてるさ。』
『偉い男だね、』
『偉い男だとも。』
『一寸吾々には眞似の出來ん事だね、』

『無論出來んさ、はゝは、』と大井は意味有りげに顔を見合せて笑つたが、
『談は是から佳境に入るのだ。』

首途

院長の梅田信吾は、其限退隱をして了つて、椎の木屋敷と云つた宏大な其の邸も、當時の縣知事某に明渡して、纔かに得たる賃金を賴りに、自分は家族を引連れて、町端れの白髭といふ、蓮の名所へ借家住居をした。

それも前島が中學へ通ふのに便利だからと云ふのが、動機であつた。

私だけはと涙を流して、踏留まらうとして駕舁の大親仁、先代以來勤めて居た、三右衛門にさへ暇を與へて、下女や書生は皆出して了つた。

而して、主人は毎日讀書に暮して、前島は學校に通ふ。又、夫人と令孃の弓子は、水仕業に憂身を窶して居た。

素より昔の名を慕うて、其の隱家さへ訪ね出だして、遠國から態々診察を乞ひに來るものも少くはなかつたが、梅田は藥を施與するのみにて、敢て謝禮を受けんとはせず。大方は皆斷つて了つて、市立病院へ行くやうにと、玄關から歸したので、何等生計の足しにもならず。切めてもの屋敷の家賃が、四人の糊口を凌ぐ代だつたのだけれど、それさへ旋て人手に渡つて、終には收入の道さへ途絶えた。

剩へ梅田信吾は、式の如き畸人だつたので、以前は道を歩く時にも、往來の人は道さへ讓つて、通したくらゐの勢だつたにも管らず、誰訪ふ者もなくなつた田舍漢の無情も怨まず、餘分の金のある時には、皆酒に代へて雷の如き鼾を搔いて寢て了ひ、又目が覺めれば古机の前に端座して、傍目も觸らぬ讀書三昧に入つて居た。

前島が中學を出て上京したのは、丁度邸の人手に渡つた時であつた。

前島は少年ながら家計の不如意を見るにつけ、梅田一家の悲境を嘆いて、是と云ふのも皆我が爲だ、少しでも家の爲、その償ひをしやうと云ふので、主人が無けなしの財布を拂いて、旅費を與へやうとした時にも、『僕は東京へ行くのを止めにして、小學校の教員になります』と言つたのを、日來は温順な梅田信吾も、其時ばかりは烈火の如く怒つて、

『此の馬鹿野郎！』

と大喝した。

而して、夫人が心ばかりの祝にと、手づから焚いて祝つてくれた赤の飯を、涙ながらに食べながら、まだ朝霧の晴れもやらぬ松並木の街道から、元は梅田の病院の助手で、當時東京の然るべき私立病院に抱へられて居た、某と云ふ醫者に連れられ

て、町端れの藤の茶屋まで、夫人に送られて立つたのである。

が、其時夫人は恁う言つた。……

『今だから申しますけれど、私も元は東京の者です。東京も淺草の者です。仔細あつて、私は、今の主人が修業中に、先の良人を棄てゝ此の土地へは來ましたが、未だに其罪は忘れる事が出來ません。

私はあのいつかの火事の時、一層家内中が燒死んでくれゝば好いと思ひました。私を誘惑したのは今の主人です。けれども私にも罪がないとは言へません。私は先の良人を打棄りました。丁度あの娘がお腹にあつた時分です。

然かもそれが新婚の夜でした。

私は今の主人と謀し合せて東京を出奔しました。

而して間もなく出産たのが弓子です。

けれども、私はまだ其時分、十六や十七で、何の罪も辨へませんでした。が、漸〳〵齢を取るに連れて、其罪が思はれて來ます。

私は然うして二人の良人の生涯を誤らせました。

今の良人は今の良人で、職業をさへ抛たせて了ひました。

又、先の良人は其後何をしてる事か解りません。

ですから決して良人が病院を無くしました事も、亦家屋敷を無くしました事も、貴方は決して恩に被ないで宜しいのです。

良人も始終然う申して居ります。

『光起の親父を亡したのも、全く俺の誤診から起きた事だ。而して俺が誤診をするやうになつたのも、元はと云へば俺の罪が然うさせたのだ。何かの折には過去の罪悪が、自己を責めて〳〵仕方ない。可愛い〻天女のやうな弓子の顔も、永くは凝視

して居るに偲びない。弓子は結局俺の子と云へば俺の子、お前の先の良人の子と云へば良人の子だ。それを忘れて居られる内は可いが、何うかして思出して來ると、居ても立つても居られなくなつて來る。而して、その場合に飛んでもない誤診をするのだ。』……と言ひ懸けて夫人は涙を拭つて、

『貴方のやうな清淨なお子に、恁麼事をお聞かせ申しては濟みませんけれど、私達夫婦の運命も、最う是限り極つて了つて居ます。

いつ、如何なる變動が、私達の身にないとも限りません。

唯、心殘りなのは娘の弓子です。

あの子は先の良人の子であるか、今の良人の子であるかは分りません。

けれども、何れにしても弓子に罪はありません。

唯惡かつたのは母の私です。

それを思ふと空可恐しくて居られません。唯、可哀さうなのは弓子です。

何うかあの子の行末を……、』と言つて、夫人は又はら〳〵と涙を流したが、

『今の良人の前では申されませんけれど、何かの時の御入用にもと思つて、此處に私が家出をする時に持つて來た少しばかりのお金があります。今の良人は然云ふ物に手を觸れるやうな方ではありませんでしたから、未だにあの子の養育費にもと思つて保存して御座います。何うぞ東京へおいで遊ばしたら、銀行から引出して、貴方が學費にお使ひなさるなり何なり、たゞあの子の行末を、』

と言つて、東京の何とか銀行の通帳と、別に一つの書付を渡した。

それには恁うある……

『東京淺草三筋町藥劑師高見健娘弓子。』

『加賀金澤市番場町醫師梅田信吾娘弓子。』

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

前島は默つて其の二品を受取ると同時に、又更めて夫人の顏を見た。

夫人は細面の色の白い、何處に一點々の打處もない、氣高い綺麗な顏をして居た。

是より先、弓子は、父の、梅田の屋敷が人手に渡ると同時に、東京の父の爲に訴訟を起されて、取戻されて了つて居たのである。

別離

前島が上京して一先づ落着いた先は本郷の森川町の助手の宅であつた。

が、燒芋を皮ごと食ひ、最中をさいちゆうと讀んで家人に笑はれたのも暫時の間で、助手が元一方ならぬ恩顧に預つた梅田の依賴に依り、八方奔走をしてくれたので、前島は間もなくその助手の宅を引取つて、助手が勤務先なる駿河臺の森山病院長の私宅へ、藥局として入る事になつた。

故郷の恩人梅田が許へは、暑さ寒さの安否は素より、試驗々々の成績は素より、主人夫婦の深切な事、東京の賑やかな事、自分の丈夫である事等を、隙さへあれば音信をして居たが、其都度必ず夫人の許より、體をば大切にせよ、家庭の事など心配せずに、折角勉强をせよと言つて來た。

が、令孃の弓子の事に就いては、別に何とも云つて來なかつた。

勿論、梅田は、筆不性な人だつたので、此人から一度も手紙の來なかつたのには仔細はない。

けれども、前島は弓子の事も上京後も氣に懸らないではなかつたが、學校が忙がしかつたのと、まだ年も若かつたので、格別訪ねて見やうとも思はなかつた。

大井の話は猶續く。

二本筋の帽子を冠つて、霜降の制服を着た、年まだ若い前島が、優等證を確乎と摑んで、駿河臺の森山邸へ歸つて來たのは、彼が上京してから五年の後であつた。

博士は彼に祝意を表して、銀時計を送つたさうだし、又博士夫人は特に染めさして置いた、黑絽の五つ紋を一着彼にお祝ひに贈つた。

前島は嬉しさの餘——其頃までも我家のやうにして、學校への往復には、必ず立寄る事にして居た、森川町の助手の宅へ、慶んで貰ひ度さに、件の紋附を一着に及んで、辻俥で駈け付けた。

兄貴分の助手先生は、然らぬだに自分が媒介をした、美少年の藥局生が、大奥へ

お覺が愛でたかつたので、自然に自分の受けも好かつたし、旁々以て鼻を高くして居た處へ、今又此の優等卒業生の、名譽を擔つて飛込んで來た、前島の五つ紋附を見ると、喜んだの喜ばぬのではない。

尤も故郷の養父へも、此趣は豫め前島は電報で知らせて置いたが、助手の喜びを見るにつけ、名譽の羽織を見るにつけ、前島は今更のやうに、弓子の行方が思ひ出されてならない……　……

あかの他人の助手でさへ、博士でさへ、夫人でさへ、恁麽に喜んでくれるものを、弓子が見たならば何と思ふであらう？

彼は、町端れの藤の茶屋まで、弓子を見送りに行つた時の印象を、何うしても忘れる事が出來ない。

弓子が、何處の何者とも知れぬ、田舍には珍らしい洋服を着た、髯を生した、人

相の好くない男に――何う云ふ譯だつたか知らないが――連れられて、田舍を立つたのは、丁度藤の盛りの頃であつた。

前島は其時學校へ行つて居たので、留守に何う云ふ出來事のあつたかは知らないが、學校から歸つて來ると、突然弓子の母親が、目を泣き腫らして飛出して來て、直ぐに町端へまで行つてくれと云つた。

『何故です？』と聞くと、其理由は云はずに、たゞ、

『弓子が連れられて行きました、今しがた連れられて行きました。立つ前一目貴方にお目に懸り度いと云つて居ました。けれども約束の時間が切迫して居たので、何うしてもお待ち申して居る譯に行きませんでした。其理由は後でお話致します。』と言つた。

而して前島が學校の道具を――梅田が詫住居の勝手口へ、抛り込む暇もなく、直

ぐに近道から町端れを投して行つた時は、丁度弓子が俥に乗せられて、痛ましやそ
の洋服男に警護をされて、藤の茶屋を立つ處であつた。
弓子は見て、
『あれ！』
と言つた。
而して、又、
『兄さん！』
と叫んだ。
けれども、連の男は振返つて見て、自分の俥夫にも、弓子の俥夫にも、『構はず、
早く、行け、行け！』
と言つた。

前島は駈足で追付かうとしたが、もう間に合はなかつた。
俥は松原の間を抜けて、遠く〳〵行過ぎて了つたのである。
けれども、弓子が警護の男の先に立つて、俥の上から振返つて見た時の目だけは、
何うしても忘れる事が出來なかつた。
而して、何故あの可憐な娘が……、昨夜までも、今朝までも、無邪氣に一緒に
遊んで居たものが……、突然囚はれの身となつて、行つたかゝ疑問であつた。
けれども、家へ歸つてから此事を聞いても、夫人は唯默つて居た。而して唯泣い
てばかり居た。
又梅田は物も言はず、古机の前に端座して、何やら讀書こ耽つて居た。
而して、前島が、同じ藤の茶屋から立つ時、始めて夫人から其理由を聞かされた
のであつた……

恁う思ふと前島は情無かつた。

邂逅(一)

けれども、助手は那樣事は知らない。

『偖て、』と小首を傾けながら、『何を御馳走しやうかね、君、食べ度い物があるならあると、遠慮なく然う言ひ給へよ。』と言ふと、此の又光ちやんの言種が好い。

『青木堂も、パラダイスも、度々行つて珍らしくもないから、精養軒を御馳走して下さい……。』

『諾、』と、助手は喜んで、早速連れて行く事にしたが、夏の事で晩方から出掛けやうとして、ふと光ちやんの帽子を見ると驚いた。

麥藁も結構だが、黑くなつて、穢れ切つて、積年來の本鄕臺の電車の埃が、山のやうに積み上つて居る。

然かも時代と云へば、十九世紀頃の遺物で、お剩に、學校の徽章だけでも附いてれば好いのだが、それさへ今は脫つて了つて居る。

何ぼ何でも、其帽子では、精養軒の食堂へは行かれまい。と思つたので、助手の達引いたのが、松屋の角の唐物屋で、ほや〳〵の麥藁帽子。

先づ立派に服裝は出來た。

赤門前まで歩いて行くと、光ちやん、腹が減つて耐らぬと云ふので、それではと俥に乘つて、精養軒へ駈付けた。

光ちやんは飲めぬ口、頻りとぱく〳〵遣つて居ると、叔父さんは飲ける口、獨酌でぐびり〳〵、陸々食ふ物も食はないで飲んで居たが、醉が廻つて來たから耐らない。

勘定を濟して精養軒を出ると、前島、今度は、『食過ぎて苦くつて仕方がないから、歩きながら歸らう』と云ふのを、先生、

『此の暑いのに家へなんぞ歸れると思ふか馬鹿奴、まア可いから僕と一緒に附いて來給へ。』か、何かで、

『活動を見に行かうぢやないか。』

で、停車場の傍からタクシーに乘ると、

『君、淺草へ行つた事があるかね、』

『無い。』

『道理で顏の色も惡いと思つた。そりや賑やかだぞ、三階作りで、イルミネーションなんぞ點いて居て。』か何かで、妙な處へ引張つて行く……。

偖て、馴染の茶屋へ行くと、

『おい〳〵今日は妙なお客樣を引張つて來たよ。』

『まア、』と見られたのは皆電氣の光りのやうに人を射る目。

前島は妙な活動寫眞だと思つて居ると、旋て又其の女中に、引張られて行つたのが、高い廣い梯子段のある大きな家。

前島は、緣側へ出て、欄干に凭れながら涼んで居ると、向側の格子の中には、不思議な扮裝をした若い女が、恰然金魚の泳ぐやうにあちこちして居る。

中には金切聲を張上げて往來の人を呼んでるのがある。

然うかと思ふと又其の格子窓の傍の入口には、變な若い衆が、變な手附をして、早言で何か言つて居る。

ふと、廊下に、靜かな上草履の音がして、ぷんと媚めかしい香水の匂ひがしたと思ふと、『貴方……、』と言つて、蹲んで、肩に手を懸けた女があるので、何心なく

振返つて見ると驚いた。

三歳の時に亡なした、母親の遺物と云ふので、いつも、故郷で、簞笥の中から引出しては眺めて居た、錦繪の二葉の上の姿が、その儘抜け出たかと思はるゝ程な美人！

否、前島の驚いたのはそればかりではない。

薄紅を差したやうな素足へ、血のやうな眞紅の天鵞絨の緒の草履を穿いて、朱鷺色の絽の長襦袢で、水淺黄の扱帶を下げて、裾へ紅白の蓮の花が、浮出たやうに染めなしてある、何とかいふ衣服をふわりと着て、濃い黑髪へ白縮緬のてがらを掛けた島田に結つた、鼻の隆い、目の淸しい、唇の色の紅なのが、忘れもせぬ弓子の顏！

前島は、一目見て、全身の血が沸返るやうに思つた。

女も、スッと身を退いて、その儘スタ〳〵と次の間の薄闇がりへ、幻のやうに

入つて行つて了つた。

途端に、

『あれ、若旦那樣！』

と言つて、又、驚いたやうに呼んだ者がある。

驚いて、其方を見ると、盆に載せた德利を、其儘持つて座敷の中へ突立つた老女で。

電氣燈の下で目を睜つたまゝ、憯然と前島の顏を見て居たが、是も忘れもせぬ三右衛門の女房である。

助手が、

『是は、怪しからん、』と言ふと、老女は突然と笑ひ出して、

『へゝへゝへ、違ひました、お人違ひでございます、何うも飛んだ失禮を……、』

と言つた。が、直ぐに坐つて助手に酌をした……。

邂逅（二）

然らぬだに、電氣燈の、光り眩き大廣間に、友禪の夜着へ寐かされて、呆氣に取られて居た順之助は、今又長襦袢の姿に變つて、屏風の中へ入つて來た、弓子を見ると、顏をも向け得ず、背後向に顫へて居た。

が、如何に、『お兄樣』が戀しいからと云つて、又逢うたのが嬉しいからと云つて、弓子は、前島の意に從ふのではなかつた。

『貴方は、私が、命に懸けて、おなつかしく思つて居る、大切の〳〵お兄い樣に、貴方が然うかと思ふ程、よく似てお在なさいますけれど……、幾らお友達のお交

際でも、私のお兄い樣の光起さんは、恁麼々々穢はしい處へ、入らつしやる方ではありません。此處は一體、何をしに、人の來る處だと思召すの？

一寸お目に懸りました時は、餘りよく似て被在いますから、私は眞實の光起さんが、恁麼處へ入らしつたのかと思ひました。けれども、私のお兄い樣の、眞實の光起樣は、お父樣が勉强をさし度いばかりに、病院をさへ人手に渡してお了ひなすつたくらゐの方です。此間高等學校を、優等で卒業なすつた方です。

御主人がお在りになつて、其の方が又立派な方で、是から又、大學へも、入れてやらうと有仰つて被在る方です。

大切な御主人持のお體です。幾らお友達のお交際だからつて、恁麼處へ入らつしられる譯がございませんと、乳母や迄が申して居ります。

貴女が餘り戀しがつて被在るから。それは貴女のお氣の所爲で、若樣らしく見え

るのです。と、乳母や迄が申して居ります。

自分が乳を呑ませて育てた、娘のやうな主人の私が、道里なら百里二百里、遠い〳〵東京の、然かも恁麽可恐しい處へ身を沈めたと云ふのを聞いて、可哀さうで〳〵熟としては居られないからと、遙々尋ねて來てくれたくらゐな、乳母や迄が申して居ります。

『お人違ひでございます、お人違ひでございます、それに就けてもお可哀さうで、私は涙が零れます。』

と言つて彼方の室に泣いて居ます。』と、顔をも得上げず、泣伏しながら、前島に言つたのである。

邂逅(三)

前島は驚いた。

是が以前の弓子であらうか？

あの處女らしい面影は何處にもない。女だ。然かも媚めかしい異性だ。

けれども、今の言葉だけは、何故か恩人の梅田が代つて、娘の口から言はせたやうな氣がする。

前島は恁う云つた。

『あゝ云ふ——お前のお母樣の言つたやうな、悲慘な事實があつたのなら、何故私

には立つ前打明けなかつたのだ？』

『私はまだ子供です、お母様が、貴方の御出發の時に、何う云ふ事を有仰つたかは知りませんけれど、私はまだ少女です、何う云ふ事情があつたかは知りません。

唯だ、『お前は今のお父様の子ではありません。貴女には、東京に、實のお父様があるのださうです。其の方から明日、貴女を、連れに來ると云つて來ました。貴女が柔順に行かなければ、警察から連れに來ます。私は實に貴女に對して、申譯のない事を致しました。貴女がまだお腹にお在の時分に、私は貴女のお父様を棄てゝ、此地へ逃げて來て了つたのです。其事が、今になつて判りました。而して私達は敗訴しました。貴女には實にお氣の毒でお氣の毒で申譯がありません。けれども、其理由は今に解ります。貴女が大きくなつて來れば……、』

と言つてお母様はお泣きになりました。が、私の東京のお父様は、始めて私に恁

麼事を云つて、お聞かせになりました。

『お前のお母様は私の仇ぢや。此のお父様の一生涯を誤らして了つた女ぢや。思出しもしてはならぬぞ。

私はお前のお母様の爲に、佛も鬼になつて了つたのぢや。

見ろ！　此の私をお前の今までの兩親が惑はしたお蔭には、私が世間の男女を惑はしてやる！

人間の拵へた、籍とか何とか云ふ物が、高見の家へ入つて居なかつたばかりに、私はお前のお母様を、お前の父から取戻す事も出來ない。

よし又肉體は取戻す事が出來ても、心ばかりは取戻す事が出來ない。

私はそれを呪ふのぢや。

お前の兩親を呪ふやうに、人間の心を呪ふのぢや。

此の、なつかしい、戀しいと思ふ心は、仇だと思ふお前の母に對しても亡せぬ。
お前のその黒髪の、一條一條を見るにつけても、母の事が思ひ出される。
何故去つた？
何故去んだ？
是ほど……胸の沸えくり返るほど……戀しいと思ふものを……!?』
と言つて、お父様は又、私に、恁う言つて聞かせました。
『けれども、人間の心ばかりは、何うする事も出來ないのぢや。私はそれを呪ふのぢや。
遺恨の有る人間が、遺恨の有る家へ火を放けるやうに、人の心を燒盡さずには置かない。』……
と、此處まで言つた時、妓は婆に呼出されて、急に何處へか行つて了つた。而して其限歸つて來ない。
又、老女も入つては來ない。
夜中、寢ずに考へたが、前島には其譯が解らない。
其内、ハヤ、夜が明けて了つた。
と、迎へが來て、
『何うぞ此方へ、』と云ふ。
行つて見ると、もう助手は起きて居て、太つた、紅い衣服を着た、可笑な妓と長火鉢に對座で、長煙管で煙草を呑むで居たが、前島の顔を見ると突然、
『や、振られたか、可哀さうに、』と言つた。

入院

其日はその儘歸つて來た。が、偖て翌日になると前島は又、戀しくて〳〵仕方がない。助手の宅へふらりとやつて來て、直ぐに昨夜の處へ連れてつてくれと云ひ出す。

助手は來たなと可笑しく思ひながら、下地は好きなり御意は好しで、又一緒に出掛けて行く……。

と、今度も亦前島の妓は、チラと屏風の蔭から、前島の姿を見ると、やゝ暫く立つたまゝ、屏風の蔭で泣いて居たが、旋て足早に次の間へ出て、直ぐに草履を突掛けて、ぱた〳〵と出て行つて了つた。

而して、それきり、又歸つて來ない。

が、餘程經つて、老女が入つて來て、

『貴方にはおいらんのお心地がお解りになりませんか。さ、直ぐにお歸り遊ばせ、今夜は私がお置き申されません。』

と言つて落着いて居れば追立てさうにする。

『何故弓子は恁麽處に居るのだ？』

と言つても婆さんは答へない。而して、

『何れ又御解りになる時がございますから、何うぞまあ今夜はお歸り遊ばして、』と言ふ。

で、仕方がないから助手を促して歸つて來ると、その翌日、亦出掛けて行つた。

と、今度は前島は名代部屋へ入れられたが、いつまで待つて見ても妓は出て來な

い。前島は我慢をし兼ねて、婆さんに、
『何故弓子は來ないのだ？』と聞くと、
『花魁は今夜お座敷におしまひのお客樣がありまして、此方へは上られません、』と云ふ。
其時、助手も一緒だつたが、
『其のおしまひと云ふのは何だ？』と權柄づくに聞かれたのには弱つたと言つて居た。
婆さんは仕方がないから、
『玉を二つおつけになる事でございます。』
『玉とは何だ？』と又高飛車に聞く。
『御祝儀でございます。』

『ぢや僕もそのおしまひをつけやうぢやないか。然うしたら來られるんだらう、何故早くから敎へてくれなかつたのだ。』
と言つて墓口を出しさうにする。
婆さんは此趣を妓に通じると、妓は又恁う言つて斷つた。
『貴方がお國の若樣にさへお似なすつて被在らなければ、縱令おしまひはおつけ下さらなくとも、お名代に上ります。けれども、幾らお金をお出し下さいましても、上る譯には參りません。と、おいらんは有仰つてゞございます。』
前島は、
『然うか、』と言つた限、怫然と怒つて歸つて了つた。
それ限、前島はもう行くまいと決心した。

けれども、家へ歸つて來ると、又しても戀しくなつて來る。行かずには居られない。それに梅田の夫人からあゝまで言つて賴まれた弓子である。

前島は、遂に決心をして、故郷を立つ時、藤の茶屋で、弓子の母から預けられた、銀行の通帳を出して見た。

と、もうその通帳は古くなつて了つて、紙の色さへ赤ばむで居た。が、中には少からぬ額面が記されてある。

前島はそれを持つて出掛けると、今度は獨りで茶屋へ行つた。

と、女將が突然、

『御名代になさいますか、それとも他樓へ行らつしやるか、花魁は今夜居ません よ、』と言ふ。

『何故居ないのか？』と聞くと、『入院致しました。』

『入院？』と聞いて前島は驚いた。

凡そ人、病を得て、入院をしやうと云ふまでには、よく〳〵の大病でなくてはならぬ。と、前島は思つたからである。

『病院は何處ですか、病氣は何ですか？』と急き込んで聞くと、

『ほゝほゝ、』

女將は突然噴出して、

『此廓内でございますがね、』

『ぢや案内して下さい、』

と前島は言つた。女將は困つた。

『貴方もねえ、駄目ですよ、殿方がおいでなすつたつて、逢はせますものですかよ。』

と言つたが、其理由が解らない。

『婆も一緒に行つて居ますか？』と聞かれて、
『いえ、お部屋に居りますよ。』
『それでは婆に逢ひませう、』と言つて前島はハヤ立騷る。女將も直ぐに送つて行かうとしたが、又、坐り直して、
『御用があるなら呼びませうか、』
『ぢやあ直ぐに呼んで下さい。』
で、女中を呼びに遣る。婆さんは急いで駈けて來たのであるが、泣いてゞも來ると思つて居た婆は、一向平氣な顏をして來たので、前島は其顏を見ると行成、
『弓が病氣で入院してると云ふのに、何故一緒に附いて行つて居ないのだ？』と慳突を食はせた。
すると、此の可愛い若樣の、無邪氣な言葉に動かされた婆は、一言もなく平謝罪

に謝罪つたが、
『病氣は何だ、院長は誰だ？』と立續けに聞かれて面食ひながら、
『御醫者樣は誰方か存じませんが、御病氣はほんのもうお風邪氣で、直きに御退院をなさいます。はいもうそれは婆がお受合致します。お部屋にお在遊ばしてもお宜しいんでございますが、お客樣でもお入來になりますと、つひ思ふやうに御養生も出來ませんものですから、』
と、安心のなるやうに言つたので、前島も吻と息を吐いた。

離愁（一）

が、家へ歸つて、何心なく――それまで缺かさず梅田の夫人から、毎日のやうに

送つて來た、その癖、帶封も解かず見た事もない故郷の新聞を手に取ると、一面の中央頃に、大きく二號活字で『梅田信吾』と云ふ文字が目に付く。

驚いて帶封を切つて見ると、『元市に貢献する事淺くはなかつた、梅田病院長信吾先生の爲に、乙劍神社の境内に、紀念碑を建て度いと思ふから、應分の寄附をしてくれ、』と云ふ意味が、知事や、市立病院長竹村幸藏などの連名で載つて居る。

前島は不思議に思つてると、時も時、折も折、脚夫が玄關へ抛り込んで行つたのを見ると、自分の名宛で、『國元の母より。』

驚いて封を切つて見ると――先づ今度の好成績を、繰返し〳〵喜んで、今後とも益す努めるやうにと、懇々と書いた末に、實は良人の信吾も永い間病つて居たが此春遂に死去して了つた、病氣は心臟麻痺であつた、直にもお知らせする筈であつたが、修業中の大切な處へ、餘計な心配をさせてはならぬ、然らぬだに光起は、嘗

ても東京へ出る前にも、家が零落して居るのを見兼ねて、出京を躊躇した事がある今又此の光景を見せたら、必ず默つては歸京せまい。たゞ、もう一度、光起の、立派になつた姿を見てから死に度いと思ふが、是も定命だから致方がない。切めて高等學校でも卒業したなら、其時になつて知らせるが可い。と、呉々も言遺して逝かれたので、その爲お知らせはしなかつたのである。必ずお恨み下さいませんやうに……。それに就けても亡父の日來のお言葉を忘れないで、一日も早く立派になつて都でお名を譽げて下さい。又、私の事は、決して御心配下さいませんやうに。一度汚名を遺した故郷へは、再び歸らうとは思ひませんから、小やかながら一軒の家を借りて、其處で安々と暮して居る。と云ふ意味が細々と書いてある。

前島も其時始めて、知らせの無かつた理由も分つた。又紀念碑の理由も分つたが盡きせぬ恩愛の情に惹かされて、机に突伏したまゝ咽び泣に泣いて居た。

けれども、弓子の事に就いては、何一言書いては來ない。

而して、『知らぬ事とは言ひながら、不孝の罪は幾重にも許して下さい。いつかは此の御恩にも、酬いる時もあるだらうから』といふ意味の手紙を出して、前島は心ばかりの供養に、七々四十九日の間、精進をして魚氣を食はなかつた。

が、其の忌日も開けて後、再び又其の手紙を齎して、弓子の處へ出掛けて行くともう其時弓子は居なかつた。そして、女將の話で聞くと、『何でも淺草の八間町邊に人の嬖妾になつて居ると云ふ事は聞きましたが、其外の事は何も知らない。此廓に居たのも暫時の間で、貴方が丁度お見えになつた時分には、もう落籍される相談が出來て居たのだ』と云ふ。

無論、其時前島は、懷中には、銀行の通帳も、弓子の最初の父の處書も持つては居たのだが、幾らあの邊を搜して見ても、何處にもそれらしい家もない。……

と言つて大井は笑ひ出した。

離愁（二）

『暑い日でね、無論あの邊は東京中でも一番人數の多い處へ持つて來て、何處へ行つて見ても皆同じやうな横町ばかりあるので、弱つて了つた。

それに、私には、そんな事は言はず、唯だ一寸尋ね度いものがあるから、一緒に跟いて來てくれ給へとばかりで、外の奴等は皆避暑に行つてるのに、東京に居殘つて居た御蔭には、プラ〳〵あの邊を一日引張り廻されて弱つた事があるのだ。

昔からあるらしい、紙屋との相角の蕎麥屋へ入つて聞くと、

『昔は然う云ふ家もあつたやうには聞きましたが、唯今は御座いません。燒けたか

それとも市區改正になりましたか、何しろ御名前だけは伺つた事がございますが、唯今は何處へ御引越しになりましたか、』と云ふ始末。

前島も其れ以上突込んで聞いたら或ひは解つたかも知れんのだが、何しろ祕と云ふ連れもあつたし、それに尋ねるのが女の事だつたので、思ひ切つては聞かれなかつたものらしい。

亦私も然う云ふ事實が、尋ねる人間に伏在して居やうとは知らぬから、『知れないもなア仕方がないぢやないか』と、無理に諦めさせて歸つて了つたが、歸りにはよか樓を御馳走になつて、始めて吻と息を吐く事が出來た。

けれどもそれはもう四五年の後になる。

その後、前島は女の行方を、尋ね當てたか何うかは疑問だが。今日始めて然う云ふ事實を、その助手の處で聞く事が出來たのだ。

助手は前島の番頭のやうな男だからね。何も彼も委しく其間の消息を詳らかにして居る。』

月島は默つて聞いて居たが、

『僕は、何故君は妻帶をせんのかねと聞いた時に、母親が肺病で死んだから、と、たゞ單にそれだけの事を言つたのは聞いたが、蔭に然う云ふ事實のある事は知らなかつた。して見るとその弓子とか云ふ女は、彼の所謂幼馴染だつたのだね、』

『無論然うさ。何しろ前島を救つた女だもの、』

『處が、その子がやゝ大きくなつた時分に、先の父親の處へ引取られたと云ふのか。ふうむ。だが、何方の父親が本當だか、それは當人にも分るまい。』

『亦、母親にも分らんのだ。』

『父親は一體、いつ結婚したのだ？』

『東京の方のかね、』

『然うさ、』

『それがさ、何でも其子の母と、關係の出來て居たのは、結婚前四五ヶ月の事らしいが、と、同時に又、二度目の父とも、もう其頃から關係はあつたらしい。

無論、それは、前島の想像に過ぎんのださうだけれど、弓子が生れた年月日と、弓子の母が田舍へ來たと云ふ、年月日とを綜合して見ると然うなる。

而して、母親と云ふのゝ當時の年輩から考へて見ても、後には變つたが、まだ其頃は、極く無邪氣な、格別貞操と云ふ事に就いては、何の考へもなかつた女らしいと云ふのだ。

で、梅田はつまり、その藥劑師の處に下宿をして居て、その內に關係が出來たのだ。

又、藥劑師と云ふのは養子で、弓子の母は家附の娘だつたのだ。

それが新婚の夜に出奔して了つたのだ。

而して、其當時はまあ藥劑師も事無く打遣つて置いたらしいが、後になつて、子供が出來たと云ふ事を聞いて、それから思ひ付いたのが子供取戻しの訴訟らしい。

無論、女は、自由意志に委せるが、子供だけ此方へ引取り度いと云ふのだ。

而して此の訴訟は隨分永く懸つたが、左に右梅田が敗訴した。藥劑師は子供を取戻す事が出來たのだ。

が、何しろ可哀さうなのは、その弓子だ。又前島だ。

梅田は死んで了つたから知らぬが、母親も亦可哀さうだ。

未だに田舍に唯た一人で、人の家の二階借をして、梅田の後世を弔つてるさうだ。

そして、幾ら前島が東京へ呼迎へやうとしても歸つて來ない。

亦、弓子の行方も知れない。』
と云つて、大井は立懸けたが、
『何うだ、行つて見やうぢやないか、前島も寂しがつてるだらう、偶には弓子の事を思ひ出して……、』
月島は默つて髭を捻り〳〵考へて居たが、
『ぢや、そんな事でいつにも故郷へも歸らんのだらう。俺にしたつて、梅田とやらの夫人には、一寸會はす顏がないからね。
だが、あの、森山の令嬢は何うしたらう？』
『芳子かね、無論前島の夫人になれる意さ。』
『一寸知らせて遣り度いくらゐのものだね。』
と言つて、二人は帽子を冠つた。

給仕は扉の傍まで送り出して、二人の後を丁と閉めた。
空には星が冴え渡つて居て、大佛の森は暗い。
二人の姿は闇に隱れた。

犬の姿（一）

その晩。お小夜は肉體が犬になつたかと思つた。
首ばかりで人間で、髪も結つて、白粉もして、それで居て手足が犬になつたかと思つた。
そして、胴には毛が生へて、蕎麥屋の土間に蹲んでるのかと思つた。
あの、前島の膝の間へ引挾まれた時の嬉しかつた事……、恥かしかつた事……

……。

お小夜は麥蕎屋の亭主や女房に、顔見られるのが極りが悪くて、一生懸命摺り抜けやうとした。

けれども前島は離さなかつた。

で、お小夜は猶嬉しくて、蕎麥屋の縁の下へ首を突込んで、くむ、くむ、と甘えるやうに鳴いた。

と、前島は何思つたか離した。

お小夜はついと抜けて出ると、土間へ蹲んで、首を傾げて、熟と前島の蕎麥食ふ顔を見上げた。

まあ、何と云ふ凛々しい顔であらう？

又、優しい口元であらう？

其内、前島は、おいと云つて、お小夜に指圖をして出て行つた。

お小夜は前島の後を追うて行くと、直ぐに本堂の階段の下から、卵塔場へ廻つて、卵塔場からは、又垣根を潜つて中庭へ出た。

本堂の縁の下には、枕元へ缺け椀を置いて、乞食が一人蓆を冠つて寢て居た。

お小夜は、庭から、灯火の見える、前島の部屋の踏石の上へ上つて待つて居ると、旋て方丈の方から跫音がして、前島は歸つて來た。

が、縁側の障子を開けて見て、

『や、來て居るな、何うしたい、何うしたい、』と云つて、犬の首へ兩手を懸けて、其の顔を覗き込んだ。

お小夜は、もう何うしやうかと思つて……、餘り極りが悪いものであるから、其の首をあつちへやつたり、こつちへやつたりして漸と恥かしさを紛らして居た。

世間ではもう皆寝鎮まつて居て、其時起きて居たのはお小夜と前島ばかりであつた。

お小夜は誰も居なくても恥かしくて、顔を背けては庭の方ばかり、一生懸命見て居たのであるが、前島は離さなかつた。

而して、頭を撫でたり、背を擦つたり、犬だと思ふものだから可愛がつて居た。

が、お小夜は餘り空可恐しくて、終には居るに居られなくなつたものだから、ひよいと踏石の上から飛降りて、南天の下へ行くと、其處でも亦縁の下へ潜り込んで、くむ〳〵と悲しげに鳴いた。

と、前島は、

『白！　好いものをやらう、來な！』と云つて、縁側の上から呼んだ。

お小夜は餘り嬉しくて――何處まで恁う優しいのかと思ふと――嬉しくて、涙が

出て、直ぐには飛んで行かれなかつた。が、

『何をしてるのだ？』と叱るやうに呼ばれた時は、思切つて飛んで行つた。

すると前島は、

『そらよ、』と云つて、ワップルを一つ投つてくれた。

が、何うしてそれが咽へ通らう？　お小夜は又飛んで行つて、前島の足の下へ跼ると、幾度も〳〵、胸の中で禮を言つた。が、前島には通じなかつた。

と思ふと、前島は又、犬の頭を優しく撫でゝ、

『もうあつちへ行つて寝なよ、』と云つて、其儘障子を閉めて室内へ入つて行つて了つた。

が、いつまで經つても灯火が點いて居て、それが却々消えさうもないので、何をして居る事かと思つて、お小夜は縁側から丁と上つて、障子の破れ目から座敷の中

を覗くと、前島は夢中になつて、兩方の手を机の上で組んで、金縁の洋書を讀んで居た。

そして、座敷の中には、彼方にも此方にも、宛で古本屋の店へでも行つたやうに、澤山な洋書が、硝子戸の入つた書棚の中に、ギッシリと詰つて居た。

お小夜は暫く中の樣子を窺つて居たが、『寢なよ、』と言はれた事を思ひ出して、直ぐに何處へか行つて寢やうと思つて、縁側から丁と降りて、偖て考へたが行處がない……

犬の姿(二)

縁の下には乞食が寢てるし、本堂では納所共が丁半をやつてるし、仕方がないから又卵塔場へでも行つて寢やうと思つて、中庭から又縁の下を潜つて、卵塔場へ出て、青苔の生へた上へ行つて、一寢入しやうと思つて、横になると、其の冷たい事と云つたら、宛で死人と寢て居るやうに！

何うして恁麽情無い身になつたかと思ふと、熟々過去の事が思はれて來て、直ぐ自分の寢て居る前の、墓の下に睡つて居るのが、何う云ふ譯かは知らないが、いつぞや今戸の橋の袂で、自分の爲に身を投げて、死んで了つた若旦那の死骸のやうに、思はれてしやうがない。

ハッと思つて、飛起きると、果して其の墓誌銘には、

『樽崎清右衛門長男清吉之墓』

としてある。

その樽崎清吉と云ふのは、あの、酒問屋の、優男の、眞面目にお小夜が結婚した

男だ。

蕎麥屋で、婆さんが、噂をして居たそれだ。

お小夜が、友禪の長襦袢で、朱鷺色の扱帶で　男だ。

又、爺樣に引戻されてからは、暫く須賀町に圍はれて居た男だ。

それが、激しい神經衰弱症に懸つて、後に今戸の橋の袂で、身を投げて死んで了つたと云ふ噂は、お小夜も兼て聞いて居た事があるのだが、眞逆に此の墓の下に、睡つて居やうとは知らなかつた。

熟とその墓誌銘を見てると、あの黑い、天鵞絨のやうな五分刈の髮の毛や、役者のやうに色の白い顏が、歷々と見えて來る。……

大切な一人息子を亡つたのであるから、兩親の恨みも容易ではなかつた。まあ、大河の流れに身を沈めた時の、その思ひは甚麼であつたらう？

お小夜は彼のお葬ひの時、潛と雜踏に紛れて藏前まで見に行つたが、あの電車道を通つた時の行列は、澤山な花や放鳥やらで、唯だ立派だと思つたばかりで、今のやうに哀れは催さなかつた。

それが何故か頻りに可哀さうになつて來る……。

恁麼處には居られないと思つて逃げ出して、直ぐ又卵塔場から方丈の緣の下へ駈け込むと、其處には又大きな野良犬が寢て居て、待兼ぬたやうにムクリと起きて、牝だと見て、好い事にして、惡戲をし懸りさうにする。

お小夜は、

『キャッ！』と云つて、飛上つて、直ぐ又方丈へ飛込むと、引かれる袖を振拂つて逃げ出した。……

すると、その野良犬だと思つたのが、和尙の聲で、慌てたやうに、

『何處へ行く？　こら、待て、待つしやい、氣が狂うたか、私ぢや、私ぢやが……、ハ、ハ、仕方がないな、』

と云つて帶擴解で追駈けて來るのである。

お小夜はもう夢中になつて、方丈から逃出すと、壁も紙門も手當り次第に、唯もう眞暗な中を手探りで逃げ出して行く……。

而して、逃げられるだけ逃げて了つてから、吻といふ息を吐くと、其處には微かに燈明が點れて居る……。

見ると、金銀の蓮の造花が立つて居て、ずらりと並んだ三寶の上には、大根だの、胡蘿蔔だの、午蒡だの、蓮根だのが、皆輪切にして土器の中に入れて、幾つとなしに供へてある。

又その供物の上の方には、金色の御堂があつて、金襴の帳の奥には、目の鋭い、

帝釋天の像が、屹然と立つて居る。

が、其目が如何にも怖らしくて、爛々と輝いて居るので、宛もお小夜を叱咤するものゝやう。

お小夜は思はずバタリと坐つて、そのまゝ高麗縁の薄縁の上に蹲んで了つた。

肉體を見ると、手も足も、何處にも毛も何も、生へて居るのではない。

けれども、氣が着くと寢衣のまゝなので、そのまゝ畏多くて居窘んで了つたのである。

お小夜は、恰も法廷へでも引出された被告のやうに、ブル〳〵と身顫ひして、居坐ひを直し、襟を直した。

けれども、何處も何ともなつて居ない所を見ると、確に佛樣のお蔭だと思つたのである。

お小夜は一生懸命になつて、口の内ではお題目を唱へ、又胸では御禮を申した。

そして、過去の罪惡を懺悔した。

すると、其の罪は許されたものゝやうな氣がした。

『其處へお母さんが出ておいでなすつたんです。』

と、お小夜は其夜の光景を物語つたのである。……

けれども、前島の事に就いては、何一言言はなかつたのである。……

犬の姿(三)

それは丁度、お小夜が谷中の大妙寺から、一夜の辛い勤めをして、歸つてからの事であつた。

お小夜は又恁う言つて言葉を續けた。……

『私は最初、氣が着きますと、どうも一度來た事がある……、確に一度來た事がある……、子供の内に手を曳かれて……、と云ふやうな氣がしてならなかつたんです。』

爺は皺手に涙を拭つて、

『そりや然う云ふ譯はない……、お前は田舍で生れたのぢやから……、然う云ふ譯はないけれども、昔からもある事ぢや。例へば乃公が寺詣りに行く、ハテ此門はいつか見た、此處に恁う云ふ松があつて、此の松に恁う蔦が絡むで、其下に草履が一足脱いである……、確かに見た、見たには相違ない、けれどもそれがいつやら分らん、お剩に此寺は始めての寺だ、いつにも來た覺えはない、然かも此の草履と云ひ、松と云ひ、蔦と云ひ、山門と云ひ確に見た……なぞと云ふ事が誰にもあ

る事ぢや。

それぢや、お前の見たと云ふのも。けれどもそれは前世の事ぢや。現世の事ではない、生れない前の事ぢや。

だからお前の手を引かれて行つたと云ふのも、お前は前世の事を見たのぢや。生れない前の事を見たのぢや。

事に依ると、それも死んだお母さんの幼少の内に見た事を、お前が歴々と見たのかも知れん。そしてお母様は何と言つた？』

と爺は急き込んで聞いた。

不思議な事にはお小夜が大妙寺から歸つて來ると同時に、梅田の三右衛門の處から、婆の處へまでお小夜の母の故郷で病死した知らせがあつたのである。

お小夜は密と長襦袢の袖で、瞼のあたりを押拭ひながら、

『その癖、私は、あのお寺へ、いつ參りましても、いつ參りましても、佛樣の前ばかりは、氣が咎めて通らなかつたものですから、お肚の中ではお參詣をして居りましても、肉體でも清めなければと思つて、一度も傍へ行つてお參詣した事はないんです。其時が始めてなんです。

それだのに……何うも變だ、確に一度來た事がある、見覺のあるお寺だ。と、その見まい聞くまい饒舌るまいのお猿さんのどッさりあるのを見て——それも誰かに手を引かれて、來た事があるに相違ないと思はれてしやうがないんです。

其癖、誰に、と云ふ事は解らないんです。そして、よく〳〵考へて見ると、寺内の飴屋で飴を買つて戴いた事もあるやうな氣がするんです。何うも變だと思つて居ますと、私にお母さんのある事に氣が着きました。

それが、ほんの一寸の間でした。

丁度私が御前樣のお部屋から逃げ出して、帝釋樣のおみ足の下でパッタリ踞いた時でした。

私は急にお燈明の灯で明るくなつたものですから、ほッと息を吐く間もなく、お供物が目に入りました。又蓮の花が目に入りました。

そして、然う云ふ事が、後から〳〵と、泉の沸き出るやうに泛んで來るのです。夜風は身に染みるほど寒ございました。

けれども肉體は火のやうに火照つて、手足は燃ゆるやうに熱ございました。肉體は蕎麥屋の土間に居た時分から、熱くて〳〵仕方がなかつたんです。

けれども、卵塔場に寢た時ばかりは、本當に冷たいと思ひました。

私は、暫くの間に、犬になつたり、人間になつたり、まあ何うしたと云ふんでございませう。』

爺は又涙を拭つて、

『丁度、吾々の生活が、緣の下の犬同樣なので、然う云ふ夢をも見たのぢやらう。お前の死んだお母さんに、然う云ふ纖悔があらうとは知らなかつた。』

『然うするとお母さんが、』と、お小夜は又も目を連瞻きながら、

『背後の金燈籠や何か置いてある、よくあの坊さん達がお經をお上げになる、薄暗い處に立つて、お香爐の上へ手を支いて、お蠟燭の灯の間から、顏を出して、私を呼んで……、』

『ふむ、』

と爺は更まつた。

『……大きくなつてねえ……ッて、優しいお聲で……、』

お小夜は言はんとして、後は言ひ得ず、そのまゝ前へ突伏して泣いた。

爺は其の背を撫で擦りながら、是も熱い涙をハラ〳〵と流し、

『まあ言へ、それから？　それから？』と聞く。

『私はお前の母さんですよ、些とも怖い事はないから此方へおいで、佛様の前ぢやつたんですの。

『よくお父さんにお詫をして下さいよ、皆な私が惡かつたんです。

貴女は先のお父さんの子ぢやなくて、矢張り今のお父さんの子でした、』ッて……、

……、』

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

その夜、爺は腦卒中で倒れた。

お小夜は吃驚して取縋つたが、もう息は吹返さなかつた。

四邊には、錦繪を取亂したやうに、例の皆、所々方々の古本屋やら、古錦繪屋やらから注文を受けたものばかりであつた。

中には描きかけの繪も澤山にあつた。

又、横濱邊りの商會から依頼を受けた、輸出品も澤山にあつた。

お小夜はそれを一纏めに纏めると、皆古戸棚へ藏ひ込んで、眞蒼になつて三筋町の本宅へ駈け付けた。

其處には乳母の婆やが唯一人、店番をして居たのであつた。

藥は直ぐに持運ばれた。

又、醫者をも人を以て迎へさせられた。

けれども醫藥の効もなく、爺は息を引取つて了つた。

爺は、世を呪ひ、人を呪ひ、就中我妻を呪ひ、我子をも、我子と知らずして呪つて、到頭其操を蹂躙し盡して了つた。

けれども、靈魂は虚僞を語るものでない。

聞くが如くんば、此の可憐の處女も、猶且つ自己の娘であつたか。又彼の破倫の妻も、猶且つ自己の妻であつたか……と氣は着いたが、遲かつた。

もう其の妻は死んで了つて居る……。

亦、お小夜も自分の爲に、日に〳〵墮落の淵に沈淪しつゝあるのである。

爺は思窮まつて、到頭恁麼事で死んで了つた。

松吹く風

後へ殘つたのはお小夜と乳母ばかりであつた。

けれども、二人は何うする事も出來なかつた。

お小夜は先づ、三筋町の小さな藥種店を閉つて了ふと、纔かな財産の半ばを割いて乳母に與へ、それを持たせて故郷へ歸し、又、自分は、他の半ばを持つて、父の居た隱居所へ引込むと、煮染屋の小母さんの世話で、或る職人と同棲した。

育ちの父と、生みの母との遺骸は、丁度乳母が故郷へ歸つたを幸ひに、その墓地が市區改正の爲に、取拂ひになると聞いて、『貴重品』として、上野まで送つて貰つたので、新佛とは別々に、一つは淺草の本願寺に、二つは谷中の天王寺に、葬つたので何の心殘りもない。

而して、故郷の兩親の遺骸を、谷中の共同墓地に葬る時、お小夜は心密かに恁う言つて禮拜したのである。

『お母様をお恨み申し度いと存じますが、私が故郷を立ちました時のお慨きを思ひますと、何うしてもお恨み申す事が出來ません。

又、お父さんをお恨み申し度いと存じますが、病院をも人手に渡して、立派な家柄の梅田の家をもお亡しになりました事を思ふと、何うしてもお恨み申す譯には行きません。

それに私には十幾年來、育てたれた恩がございます。又、何より光起様をお救ひ下すつた御恩がございます。

上京を致しましてからは、隨分長い月日の間、悲しい辛い思ひを致しました。けれども懺悔を遊ばしました、お母様やお父様のお心に較べましたら、云ふにも足らない程かも知れません。

又、御婚禮の夜にお母様にお居なくなられ遊ばしてからの、お爺様のお苦みに較

べましたなら、何でもない事なのかも知れません。

ですから誰をもお恨みは申しません。

私は諦めました。

大きくなつたら光起様のお側にと、幼少心には思つて居りましたけれど、心の髓まで腐融つて、了つたやうな此の體を、例へ光起様は好いと有仰つても、私の方からは持つて行く事が出來ません。

又、麼恁腐つた體を、それでも好いから引取つて遣らうと有仰るほど、光起様は御深切ではなからうと思ふのでございます。

光起様には名譽がございます。けれど私にはそんな物はありません。

いつぞやの夜は、煩惱の、犬になつてまでお尋ねしやうと思ひましたけれど、生憎光起様のお部屋には、二人のお客様がございました。

よし又、お一人でお在遊ばした處で、　婦の私が、どの顔下げてお目に懸る事が出來ませう。

私は、お客樣の在つたを幸ひに、諦めて了ひました。

廊では、恁う云ふ處へは、いらつしやる方ではありませんなどゝ、豪さうな事を申しましたけれど……、あの時分はまだ少女でした。

私は、戀の、どんな物かも、理解する力を持つては居ませんでした。

けれども、再び邂逅ひました時は、もう幼い處女ではありませんでした。

而して、戀と云ふものゝ、可怖しい力のあるものだと云ふ事を知りました。

お父さんが梅田の邸を、お亡ぼしになりましたのも、お母樣が高味の家を、お亡ぼしになりましたのも、皆其爲でございます。

然う思ふと亦、お爺さんのなさつた事も、決して罪惡とは思へませんでした。

で、私は、お爺さんが、自分の身に火を放けてでも、お亡りになりましたやうに、私も、お墓の穴の中のやうな、あの九尺二間で死んで了はうと思つて居ます。

お父樣は、戀の爲に、梅田の血統をお亡しになりました。

お母樣も、戀の爲に、高味の血統をお亡しになりました。

切めて私だけはと思つて、氣が着きました時分には、もう私の體へも虫が入つて了つて居るのでございます。

悲しいには悲しいけれど、是も運命だから致方がありません。

つまり、お父樣も、お母樣も、私もお爺樣に呪はれたのでございます。

けれども、そのお爺樣も、矢張りお亡りになりました。

淺ましい、忌らしい、穢らしい繪の中へ倒れて……。

ま、何たる、因果な、身でございませう……。』

と言つてお小夜は涔々と泣いたが、墓場には松吹く風のみ、誰れ應ふる物も無かつた。

洗濯日和(一)

露地には折しも二人の婦人が、洗濯物をしてゐた處で。

此處に水道の共用栓、花崗石の流しの中へ、可愛らしい盥を置いて、傍らに黄色なシャボン。蹲んで、瀧の如く龍頭の口からザア〳〵と溢れ出づる水を、盥に受けて、溢れさせて、黒縮緬の襷掛で、精々と紳士用のシャツを洗つて居るのは、年紀の頃四十八九の老女。

又其傍の格子戸造り、店へ二枚の障子を塡めた、小さいが小綺麗な、一軒長屋の

戸袋に、未だ眞新しい白木の張板、足許に小さなばけつ、房々とある黒髪を、惜氣もなく櫛卷にして、日向と云ふのに手拭も冠らず、雪の樣に白い細面へ、燦と的面に日影を浴びつゝ、日に當てるのも勿體ないやうなのを、江戸紫の玉襷、二の腕まで露はに出して、燃ゆるやうな紅絹の裏地の、濡れたのを水を切つては、しゆッ〳〵と張つて居るのは、きりゝしやんとした身の取廻し、痩體で、すらりとして、華車で鐵火で、甲斐〴〵しくて、水際の立つた美い女である。

右手の疎な竹垣一重隔てた向うには、竹垣へ密接いて、燒跡の假小屋のやうな、コケラ葺の棟割長屋があるが、障子も何も開放しにして、緣側の飯櫃に倚懸りながら、十八九になるお轉婆らしい娘が、ペコペコ三味線を彈いてるかと思ふと、又其の隣のブリッキ屋では、印半纏を一枚着た限、いやに色の蒼白い、胸も腹も露出しにした、職人が三五人、車座になつて細工場に坐つて、戰地にでも送るのであらう、

がちやん〳〵がちやん〳〵と、鑵詰の鑵を拵へて居る。

其の又隣りの長屋では、嬰兒がビイ〳〵泣いて居る。母親が叱つて居る。刷毛屋の廟で目白が啼き、ランプの笠屋で誰かゝ笑ひ、厩橋の煙突の煙が、露地の眞上と思ふ邊りを、黑雲のやうに横はつて朦々。日蝕をしたやうになつて、太陽が銅色になつた。と、思ふと、日影がどんより……

『一體、小母さん、いついらつしやるの、小母さんは、今日は見える、今日は見えると云つて居ながら、些とも旦那樣はおいでなさらないぢやないの、お孃樣は然ぞお寂しいでせうねえ、』

『と、私も思ふんですがね、屹度お役所の方が忙がしくて、些とも手が離されないんでせうよ。

ですから、御覽なさい、あの通り、憤れつたさうに、朝から晩まで、ピアノばかり彈いて被在る。』

女は張物の手を留めて、ふと耳を澄したが、

『隨分馬鹿にしてるわねえ……、好い音には好い音だけれど、世間に人もないやうに、何うでせうまあの聲の高い事、宛で半鐘が鳴るやうだわ、』

『自分の思ふ事が儘にならないもんだから、憤れつたくて仕方がないんでせう。何てつたつて旦那樣は、御自分の御勉强以外には、餘り女の事には冷淡な方だし、お孃樣は、あの通り、こつてり好きと來てるんだから遣切れませんわ。

尤もお金に御不自由のお有んなさる御身分ぢやなし、美味い物は食べ傍題、寢度い時は寢て、起き度い時は起きて、あゝやつて日がな一日、ピアノを彈いたり、唱歌を歌つたり、飽きて來れば、寢臺の上へ寢轉んで、手當り次第に小說本を讀んだり、雜誌を讀んだりしてるんだから、陸な事は考へませんや。

此間も、二階の、欄干の前の、廟の上へ持つて行つて、屋上庭園を拵へるとか云つて、植木屋を呼んで、指圖をしてお在なすつたが、それはまあ好い内です。

『婆や、吉原ッてどんな處？　私まだ行つて見た事がないから、一緒に行つてくれない事？』

と、昨夜も晩方からお供を仰せ付かつたには、私も弱つて了ひました。

何てつたつて、彼處い等は、顔の賣れてる處ですからね。

何うかして、顔見られやしまいかと思つて、

『貴女方のいらつしやられる處ではありません、』と言つたが聞かれない。……』

洗濯日和（二）

『仕方がないから夜を幸ひ、此の暖いのに頭巾を冠つて、

『それぢやお供を致します、』と云つて出掛けたは好かつたが、成るたけ人の目につかないやうにと思つて、裏通りをぶら〳〵行くと、田原町の古着商の店先に、襠襠の古着のぶら下つてるのを見て、

『婆や、これぢやないの、花魁の着てるのは？　私もいつか帝劇で見た事がある わ、宮城野信夫の時に、』

『へい、然やうでございます、』と言ふと、

『場所が場所だわねえ、あんな物を賣つてるんだもの、』と、お嬢様は熟々感心して見てお在なすつた内はまだ可かつたが、旋て、

『婆や、聞いて見ない事、幾らするものだか、安けりやア買つて行くわ、』

と、途徹もない事を有仰るから、

『あんな物を何に遊ばします、貴女方のお召になるもんぢやありません、』と言ふと、
『いゝえ、要る事があるのよ、まあ、默つて値を聞いておいでよ、』と笑つて被在る。
それから私は、いつか女の雜誌で見た、お孃樣の假裝會とかのお寫眞の時のやうに、何か又御入り用な事があるのかと思つて、つか〳〵と店へ入つて行くと、もう番頭は心得て居て、
『へい〳〵、どれが可うございますか知ら、』
と、どれでもみんな卸しさうにする。
お孃樣は飛んで入つて、
『婆や、そんなに幾つも見なくても可いのよ、彼處のアノ硝子窓の中に入つてる、あれだけで澤山なのよ、』
と、何と目もよくお利きなさるね。薄墨へ紅白の蓮の花を裾へあしらつた、それ

は〳〵爽然とした柄、』
『え？』
と女は張物の手を留めた。
婆さんは盥の上へ、手つきで、模樣を仕方でして見せて、
『此方の方に萌黃で卷葉があるかと思ふと、此方の方にぱつと開いた葉がある。その間々に紅白の蓮の花が、餘り濃くなく遇らつてあるのですがね。何だかお寺樣見度いで、寂しいには寂しいのさ。けれども品の好い模樣でした。
それを買つて、家へ屆けさせるのは厭だつて、歸りに持つて行くからつて、店へ預けて、偖て、それから大通りへ出て、仲店へ入つて行くと、今度は、
『婆や、白首を見せてくれない事、』
『えゝ宜しうございます、』

と云つて、あの邊を一軒々々案内して、狹い露地をヒョイと出ると、
『成程、隨分悲慘なものねえ、だけれど放縱で、却つて好いかも知れないわ、』
と、角に、御とまり宿、一等六十錢、二等四十五錢、三等三十錢、などゝ行燈に書いてあるのを見て、
『安いわねえ、是でも旅籠屋、一度お兄樣と泊つて見度いわ、』
『へゝへ、御馳走樣でございます、』と言ふと、
『どんな人の泊る處なの、何れ浮浪人か、小商人か、そんな物でせう。お兄樣も本當なら、勉强なぞ止すと好いんだわ。然うすりや私達も浮浪人の仲間へ入つて、勝手氣儘な事がして歩かれるんだけれど、何だつて、男は皆な、あゝなんでせうねえ、此處へ來ると、放縱な生活をしてる男も、隨分澤山に見懸けるけれども、お兄樣は本當に話せないよ、滿らぬ女に義理立てなんぞして、』と有仰つたが、

『でも好い物が見付かつたわ、』
と、曩の裲襠を思ひ出して、五十間へ入つて行くと、彼方の格子の前へ行つては立つて見、此方の格子の前へ行つては立つて見、寫眞店の前へ行つても、一人々々立つては其顏を見て、到頭ぐるつと一廻りしてから、又仲の町へ引返すと、
『婆や、此廓で一番大きな樓は何て樓？』
『……』
『然う、其の樓に、昔、二葉とかいふ美い女のお女郎が居て？』
『へい、ございましたにはございましたけれど、幾代も續きましたので……、』
と言ふと、
『然う……、道理で解らない筈だと思つた、』
と言つてその儘お歸りになりましたがね。時々突飛な事を言つたり被成りする事

があるので私も驚いて了ふ事があるのですよ。』

洗濯日和(三)

女は默つて聞いて居たが、

『そして裲襠は何うなすつたの？』

『歸りに背負つて持つて歸りますとね、お嬢樣は、

『まあ綺麗ねえ、何處にも浸染一つありはしないわ、』

と言つて簞笥の中へお藏ひになりましたが、何のお役にお立てなさるお意ですかね。

尤も、時々、女優の風をしたり、藝妓の風をしたり被成る事は、珍らしくもありませんがね。

此間も、

『婆や、來て見ない事？』

と、二階からお呼びになるから、何の御用かと思つて行つて見ると、何うでせう、まあ呆れるぢやありませんか。

肌脫ぎで、鏡臺の前へ坐つて、立膝で、肉體中に、極く彩色で刺青を書いて、島田の前髪に紅いてがらをかけて、顏を作つて、

『何う？　似て居て、辨天小僧に？』

と、振返られた時の目の凄さ！

又お化粧も上手でさ。

其の前の晩に國華座の純帳芝居を立見にお連れ申したのが、直ぐにお氣に入つて

その騒ぎなんですがね。

そして何と有仰るかと思ふと、

『私が男なら俳優になつて見度いわ、女優ぢや、厭だけれど、』ッて、直ぐに強請場の眞似を被成る。その又臺詞が巧いんでさ。

全く素人にして置くは惜いもの。その癖、から世間不見の、お嬢樣と來てるんですからね。口ばかりは達者でも、何でも此方の言ひなり次第。

然う言つちやア可笑なもんだけれど、全く惡い處へおいでなすつたんでさ。

だが仕込甲斐が有りますね。

何だつて、お前さん、かなめ垣と、門構と、犬ばかり居る山の手から、急に恁麽下町へ、いらつしたんだから耐りませんや。

見る物、聞く物、皆な珍らしくて、『宛で昔の繪の中に居るやうだわね、』なんて、

此間も駒形邊をお供してると、歸るのも忘れて大川の上を見ておいでなすつたが、すつかりお氣に召して了つたと見えて、やれ、錢湯へ行き度いの、寄席へ行かうの、活動へ行かうのと、漸々碎けた事を有仰る。

そして、何か知ら目新らしい物を目付けちやア、然うやつて、お家へお歸り遊ばしてから、芝居の眞似をしたり、藝妓の風をしたり……、』

『小母さんが又傍に居て巧い事を言つて煽動てるんでせう、私も隨分若い内には、色んな惡い事を敎はつたものだ、』

と女は寂しく微笑んだ。

『へゝへ、何、然うでもないけれど。』と、婆さんは薄氣味の惡い笑ひやうをしたが、『だつて、よく又、何を言つても、へえ〳〵ッてお聞きなさるんだもの。仕込甲斐があるぢやありませんか。誰かさんと違つて、おぼこぢやないから。……

いつかも活動の歸りに、夜、遲く歸つて來ますとね。人通りの少ない――町邊を、縫ッつ、潛ッつ、私達二人の先へ立つて行く女房があるんでさ。

處がその女房がさ、一人で醉つぱらつて、ぐでん〳〵になつて、あつちへよた〳〵、こつちへよた〳〵しながら、鼻唄を唄つて行くぢやありませんか。

と、お嬢さんは月明りに透して見て、私の袖を引張つて、

『まあ、婆や、女ぢやない事、珍らしいわねえ、偉いわねえ、山の手にはあんな人は居ない事よ、女で、然かも好い年をして、鼻唄を唄ふなんて、全く此處はをかしな處ね、何處へ行つてもあんな人が居るのね、ほゝゝ、』

と言つて、笑つてお在なさる。

『お嬢樣はお酒を召食りますか？』と云ふと、

『えゝ呑んでよ、でも一人ぢや厭だわ、お兄樣となら、』

なんて惚話けてお在なすつたがね。

それがお醫者のお嬢樣なんだから、驚くぢやありませんか。』

『え？』

と又女は聞耳立てた。

惡智慧(二)

『あゝいふのは天禀ですね、仕込まうたつて然うは行きません。誰かさんぢやないけれど。……

で、私が有りもしない智慧を絞つて、

『昔は恁う云ふ毒婦が居りましたの、あゝいふ女俠が居りましたの、』なんて、紛紜

を話しますとね、それを又へえ〳〵ッて感心して聞いてお在なさる。
誰かさんぢやないけれども、聞くやうな風をして、その實知らぬ間に打遣つて了ふやうなんぢやない。……
何しろ頼母しいお嬢さんですからね。
中にも一番お氣に召したのは、水茶屋の女の話でさ。
『へえ、然う言や何處か公園には、未だにその風が殘つて居るわね、』
なんてそりやア聞敏いんですからね。
此頃ぢやア毎晩々々講談本で夢中でさ。
最初の内は、金ピカ物の、難かしい小説にばかり夢中になつてお在なすつたが、
此頃ぢやア、此地へ來てから、面白くないとか云つて、あの紅本の切つたり突いたり、島田ッ首を振亂したり、短刀を振廻したりしてる本を、夢中になつて讀んでお

在なさる。
あの時分にやア何でもいゝんですね。
そして、恁う云ふ風がいゝの、あゝいふ風がいゝのッちやア、惡い事を研究してお在なさる。
あれぢや陸な事はお覺えになりませんね。
恁う云ふ處にお置き申しちや、全くお末の爲によくない。
と云つて、此儘出て行かれて了つちやア、私の頤が乾上りますしね。
ほゝほ、巧くは行かないものでさ。
誰かさんのやうにもう素ッ堅氣になられて了つては、御自分樣は好からうけれど、此方人等は滿りませずね。』
『有仰いよ、』

と女は笑つた。

『ですが、これも天性とやらで、思ふやうには行かないものですね。立派な手腕を持つてお在なさる、誰かさんのやうな人は、一度恁うと思ひ込むと、挺でも動かなくなつて了ふし、漸々好い方へ〳〵と、仕込まれねばならぬお嬢樣のやうな方は、却つて此方の思ひ通りになるし。處が、お嬢さんにもそれがあるんでさ。お邸へもヤイノ〳〵言つて、人橋かけて申込んで來る、立派な方々の御令息は、皆お嬢樣のお氣に入らず、何故か親御樣も不賛成で、御當人も餘り乘氣のしてお在なさらない、内の旦那と云ふのは大層物はお出來なさるさうだけれど、お嬢樣の方で、何うしたらお氣に入らうか、何うしたら可愛がられうかと、そればつかり氣を揉んでお在なさる。

全く傍で見て居てもお可哀さうなやう。

容色なら、氣立なら、何處に一つ申分はなし、學問はお出來なさるし、才はある、氣は利いてる。大概の男なら、此方から進んでゝも、我有にしやうとするのを、何う云ふものか、内の旦那ばかりは、餘り好い顏をなさらない。

いつかも、そッと、夜忍んで、番町の方へ入らしつた時聞いてると、お嬢樣は旦那樣の胸に縋つて、洋服の、飾り釦を弄りながら、思ひ迫つたやうに、『ねえ、ねえ、ねえ……、可いでせう、後生だから、お願ひだから、』と泣いてお在なすつたが、旦那樣は知らん顏をして、外方を向いて、返事もなさらない。そして餘程經つてから、

『貴女のお言葉は感謝する、けれども……、私には言ふに言はれない、心苦しい理由があるのですから、』と、それ限打遣つてお歸りなすつた。

後で、わあつと云ふ悲しい泣聲が聞えるかも、何事ならうと思つて飛んで行つて

見ると、お部屋にはお嬢様が突伏して、取亂して泣いてお在なさる。
『何うなすつたのです、もし、お嬢様、お嬢様』と申上げると、
『婆や……、私、悲しいわ、嫌はれたわッ……、』と云つて又わつとお泣きなさる。……
『まあ、旦那様も旦那様だ、女の口から思詰めて、恁うとまで言ひ出したものを、』
と、私も悔しくなりましたからね、直ぐにお後を追掛けて行くと、アノ新見附の暗闇で追付きましたから、
『もし、旦那様、一寸お待ち遊ばして下さいまし、恁うして居る間も怖うございます、お嬢様が何うかなさりはしまいかと思つて。何うぞ直ぐにお歸り遊ばして下さいまし、』と言ふと、振返つて見て、
『婆、貴様も大概にしろ、何だ、その足は？』

と云はれたには、私もギャフンと參りましたね。
何だつて、お前さん、唯ぢや威かしが利かないと思つたもんだから、私や跣足で追ッかけたんぢやありませんか。處がそれを見現はされましたの。
『はい、』ッと言ふと、
『家へ歸つて然う言へ。私は兄妹になる約束はしましたが、夫婦になる約束はせんと。喃、それに、狂言染みた今日のやり口には、スッかり愛想が盡きて了つた。自分の心から出たのぢやあるまい。屹度誰か指金をしたものがあるんだらう。餘り然う云ふ物に近いてると、その内にはよくない事が起きるから、今の内に何うかおしなさいと……、』
私も何とか云つてやり度いと思つたが、此處で言つては忠義な乳母が何にもならぬと思つたから、唯大人しく、

『はい……、』と言ふと、
『うむ、殊勝によく言つた。本心ぢやアあるまいけれど、芳の事をよく賴むだよ。お嬢さんは、あゝ見えて、大切の博士の一人娘だからね、』
と、大人しい大人しいとばかり、馬鹿にして居た先生は、何うして〳〵中々の食はせもので、色目な、可愛いゝ顏をして居ながら、べらんめえ口調で、物を言ふ。何うもたゞの書生さん上りぢやないと思つたから、此方も悔しいが、へい〳〵して、
『よく解りましてございます、』と言ふと、又、
『惡い事を敎へちや困るよ、はゝ〳〵、解れば結構だ。』と言つて、そのまゝスタ〳〵行つて了ひましたがね。
後で聞くと、何でも、私の事を、何處かで見て知つてる方ださうで。それに、その又旦那樣と云ふのが、今こそ學者で、大人しい方だが、生れは何でも藝人の子息

で、人の家へ放火をしさうにした事があるんですとさ。』
『まあ！』
と言つて、女は又其の淸しい目をキと睜つた。
『處が然う云ふ事は知らないものだから、此方やアたゞ可愛いゝお坊ちやんだとばかり思つて、好い加減に遇つて居たのが運の究め。
直ぐにお拂箱に成りさうな處を、漸とまあお嬢樣のお取做しで、此首だけは取留めましたがね。ハ、、、。
その換り、それから此方は、變に旦那樣の顏を見る度、擽ッ度くて〳〵、此の惡黨が成るたけうちで、顏を合さないやうにして居る氣の利かなさ。
でも、肝心のお嬢樣がまあ、可愛がつて下さるからね。娘も、『お母さん、大概にしてお置きなさいな、』と言つてるが、是も病だから仕方がない。

精々煽動て、一日も早く、お嬢様の有にして上げ度いと思つてるが、何うして中々野郎殿が頑固だから骨が折れます。』

惡智慧(三)

『何でも私の考へぢやア、餘程惚れてる女があるね。

その證據にや、お前さん、お前さんの前だけれど、旦那様はよく、夜、何處へ行くでもなしに、ひよいと家をお明けになる事がある。

尤もお年齢がお年齢だから、無理はないと思ひますが。手近い處に好い寶の山が轉がつてるにも管らず、その方は振返つても見やうとしず、何處か知らへよくお出掛になる。……

處が、それが又不思議なんでさ。何も旦那様の御身分なら、柳橋だつて、何處に不自由もない筈だのに――いつも潜と私がお嬢様のお供で、電車で後を跟けて行くと――何と、旦那様の入らつしやる處が、變な處なんぢやありませんか。

濱町か、蠣殼町、然うでなきや向う兩國……、それも小さな待合ばかり……。

私も思はず可笑しくなつて、或時、

『まあ、旦那様は何てい方だらう、家に居ちやア鹿爪らしい顏ばかりしておいでなすつて、恁麽處へばかり入らつしやるんですかね、』と言ふと、莞爾お嬢様は笑ひながら、

『それにも實は深い理由があるのよ。だつて幾ら探したつて、見付かるもんですか、馬鹿々々しい。それよりも早く諦めて、私の言ふ通りにおしなされば可いのにつて、

いつも言ふんだけれど聞かないんだもの。お兄い様は意地つ張だからね、何有、いつかは探して見せる、探し當てずに置くもんかなんて、餘り言ふと自分の弱點とやらを、衝かれるやうな氣がするもんだから、いつも終ひにやァ怒つて了ふんだもの。

だけれど、それは無理なのよ。私には分つて居るのよ。幾ら探したつて會へるもんですか。會へたつて失望するばかりよ。……

けれども、何も彼も世間の事は知り拔いてる程知つて居て、其實、まだお兄い様はお坊ちやんなんですからね。矢張りいつまでも少年時代の美しい幻影とかが消えずに居るんでせう。

だから、その者に行會はない內は、何うしても私の兩親や、私の言葉に從ふ事は出來ないと、あゝやつて意地を張つてるんですがね。又お母様も然う言つてるのよ。あの方に然う云ふひつかゝりのある內は、私も安心して御婚禮をさせる事は出來ない。それを又いゝ事にして、あの方は責任を遁れてるんですがね。でもいつかは我折れる時もあるだらうと思つてるんです。』

と、私には何が何だか、さつぱり譯の分らない事を言つてお在なすつたが、

『ちやァ誰方か旦那様のお氣に入りの方があるんですかね、』

といふと、

『えゝ、然うよ、』

『そしてその對手の女といふのが、恁う云ふ處のものなんですかね？』と言ふと、

『藤井さんが敎へたんだもの。藤井さんッて代診の方よ。その方はお兄い様の事を、何も彼もよく知つてるの、』と有仰つたが、變つたお道樂もあるものですね。』

と言つた。……

世は様々（一）

『市兵衛さん、市兵衛さん、見つともないからお止しなさい。』

年紀の頃は、八つか九つ、その穢い事と云つたら、赧ッ毛で、洟を垂らして、衿垢で、裾の切れた、キャラコの幾度か洗晒した着物、口の周圍を眞黑にして、頻りと豆捻を舐つて居るのが四五人、襁褓を乾した羽目板の下に立つて、聲を揃へて唄つて居る。

露地と云へば露地、身を斜めにしなくては、通れぬやうに細い處を、是は又爽然、した服裝。

此の邊りには珍らしい洋服扮裝の若紳士が、彼方此方家を尋ねる樣で、急ぎ足で

入つて來たが……。

兩側の棟割長屋には、ムッとする程人氣が多いので、忽ち呼吸が詰りさう。

仕舞屋ではあるが、人目も可煩し、硝子で處々切張をした、障子と、障子と、障子との間を、足早に颯々と拔ける。

と、露地外は乃ち小島町の通りで。通りと云ふと廣いやうだが、それが大方棟割長屋……。

二階家、一軒家、門構の家も、處々にないではないが、それも本の四五軒ぐらゐなもの。

彼處の露地の入口にも、此處の露地の入口にも、軒下にも、廂の上にも、多少日の當る處とさへ言へば、遠慮會釋もなく女の物が乾してある。

然かも通りの遠近には、日向日蔭の容赦もなく、見渡す限り子供が大勢。溝へ蛙が